

平成28年度
静岡県立大学短期大学部

F D 委員会報告

I 平成 28 年度 FD 委員会活動について

1. 平成 28 年度 FD 活動の基本方針および活動実績

従来から行っている継続的な事業を執り行うことと、昨年度着手した FD 事業本来の目的に立ち返るべく、PDCA の手法を視野に入れて昨年度変更した点を中心に FD 活動の全面的なチェックを行い実施に移すことを基本方針とした。

これに従って実施した事業は以下のとおり。

- ・FD 講演会
- ・授業評価アンケート
- ・授業参観・授業公開
- ・FD 新任者研修

以下にその詳細を報告する。

1 FD 講演会

第 1 回短期大学部 FD 講演会 平成 28 年 9 月 2 日（金）13 時 00 分～14 時 30 分

講師：神戸常盤大学教育学部こども教育学科教授 牛頭哲宏氏

演題：アクティブラーニングの実践と評価

第 2 回短期大学部 FD 講演会 平成 29 年 2 月 28 日（火）13 時 30 分～15 時

講師：愛知県立大学健康支援センター教授 田中生雅氏

演題：躁うつ症状を呈する学生への対応と注意点

2 授業評価アンケート

学生による授業評価アンケートの実施は、平成 20 年度までは自己点検・自己評価委員会が、平成 21 年度の FD 委員会発足後当委員会が行っている。本年度も従来どおり前期及び後期の教員（専任教員と非常勤講師）が、授業終了前 2 週間の授業期間内で、担当科目の授業終了 15 分前に実施した。また、原則として、教員単位で授業アンケートを実施し、集計結果を各教員（専任教員と非常勤講師）に配付した。

3 教員相互の授業参観・授業公開

従来の授業公開は、公開する教員が固定してきていること、授業・実習の関係で参加が困難なケースが多いことから、参観を希望する教員が直接または FD 委員を通じて参観したい授業の担当者に申し込む方法に変更した。26 年度は新任者には参観を義務づけることとしたが、27 年度からは全教員に拡大したが実施率は極めて低かった。

独自で模擬事業を行った学科があった。実施の詳細と効果については次年度の委員会で検討する。

4 FD 新任研修

平成 28 年度新規採用の教員 4 名を対象として FD 新任研修を行った。

- ・内 容:①授業をするにあたって事前に念頭に置くこと(授業評価アンケートとは)
- ②授業実施後の自己評価
- ③授業公開の見学
- ④FD 講演会, FD 集会, 科研費獲得セミナーへの参加

5 FD 事業の見直し

認証評価実地調査の際、FD 講演会への参加者が少ないことが指摘された。全教員が参加しやすい日時を設定するよう努力しているが、講演者の都合などとの兼ね合いで調整が困難な状況が続いている。他部局開催の講演会への参加を促すとともに、自己点検自己評価委員会などと連動して、内部質補償を推進するツールとしての役割を検討し教員の参加を促す方途を探ることとなった。

授業参観・授業公開は、授業評価アンケートの補完機能または「ピア・レビュー」を目的としていたが、機会の不均衡から、事業への理解が得られていないのが実情であるとの結論を得た。また、この事業は、医療現場から教育現場へ移行した教員への研修の機会として考えられてきた一面もあったが、看護学科が看護学部と統合したため、その役割を減じた側面もある。今後は、講義内容や教授方法の共有・調整を目的とした、ファカルティ連携型の実施方法を検討することになった。

6 「FD 活動報告書」の編集発行・公開

授業アンケートの集計が納入されてから、下記の内容で報告書を作成する。
これまでどおり、①紙(冊子)②DVD(CD-R)③WEBの3種の媒体を作成する。

- ・授業評価に対するフィードバック
- ・授業評価アンケートの現状と課題
- ・授業参観・授業公開の現状と問題点
- ・各種事業の実績報告

7 委員会開催回数

9 回

Ⅱ 学生による授業評価アンケートの実施方法および教員のコメント

1. アンケートの実施および教員にコメントの作成について

1. 1. 授業評価アンケートの実施方法・内容

学生による授業評価アンケートの実施方法・内容は、平成 23 年以降変更していない。
実施方法は次の通りである。

- ①アンケートの実施時期は原則として「最終授業時またはその前週授業時」とした。
- ②アンケート用紙の配布は教員が行う(原則として授業終了 15 分前)。
- ③アンケート用紙の回収は学生が行う。教員が用意した封筒にアンケートを入れ封緘し学生が学生室に提出する。
- ④学生室は質問項目ごとの集計及び自由記述欄のワープロ打ちを外部業者に委託する。
- ⑤業者から納品された④の教員個々のアンケート集計と自由記述をワープロ打ちしたものを封筒に入れ、FD委員会から各教員へ配付し、「教員によるコメント」の執筆を求める。
- ⑥上記①～⑤は、本学専任教員および非常勤講師の担当科目をアンケートの実施対象とする。但し、現段階では非常勤講師の場合は、協力依頼とする。
- ⑦担当科目のうち、アンケート実施時に受講者が 5 名以下の場合は回答者が特定される可能性を回避するため、アンケートは実施しない。
- ⑧オムニバス方式等、複数の専任教員で 1 科目を担当する場合、アンケート用紙はシラバスの科目担当筆頭者に配布する。
- ⑨非常勤教員と専任教員で 1 科目を担当する場合は専任教員がアンケートを実施する。

授業評価アンケート用紙 平成 24 年度のアンケート用紙(次ページに掲載)は、平成 19 年度後期から導入したマークシートを使用した。「Ⅰ授業のあり方」、「Ⅱ教え方」、「Ⅲ総合評価」、「Ⅳあなたの取り組み方」及び教員が自由に質問項目を設定できる「Ⅴ自由項目」の大項目の下に小項目とし 19(各教員が設定することができる自由項目 2 項目を含む。)の質問が提示されている。

学生による評価は、各質問ともに「そう思う」、「ややそう思う」、「どちらとも言えない」、「あまりそう思わない」、「そう思わない」までの 5 段階によって行なわれる。自由記述欄は、「良いと思ったこと、感心したこと」、「改善してほしいこと、付け加えてほしいこと」、「その他、この授業についての意見、感想等気づいた点があれば書いて下さい」と、アンケート項目だけでは表現しきれない当該授業に対する学生の意見、感想、要望等を具体的に述べられる内容となっている。

1. 2. 授業評価アンケート用紙

平成 28 年度のアンケート用紙(26 年度と同じ)は、平成 19 年度後期から導入したマークシートを使用した。「Ⅰ授業のあり方」、「Ⅱ教え方」、「Ⅲ総合評価」、「Ⅳあなたの取り組み方」及び教員が自由に質問項目を設定できる「Ⅴ自由項目」の大項目の下に小項目とし(各教員が設定することができる自由項目を含む。)の質問が提示されて

いる。

学生による評価は、各質問ともに「そう思う」、「ややそう思う」、「どちらとも言えない」、「あまりそう思わない」、「そう思わない」までの5段階によって行なわれる。自由記述欄は、「良いと思ったこと、感心したこと」、「改善してほしいこと、付け加えてほしいこと」、「その他、この授業についての意見、感想等気づいた点があれば書いて下さい」と、アンケート項目だけでは表現しきれない当該授業に対する学生の意見、感想、要望等を具体的に述べられる内容となっている。

使用した授業評価アンケート用紙

授業評価 アンケート

このアンケートは、今後の授業改善の参考資料とすることを目的として、実施いたします。アンケート結果は授業の改善に反映させるものであって、あなたの成績評価に影響を与えるものではありません。集計結果は公表されることがありますが、回答者が特定され不利益をこうむることがないように措置しますので、率直な回答をお願いします。

授業科目

担当教員氏名

学科・専攻

看護学科 ①
歯科衛生学科 ②
社会福祉学科 社会福祉専攻 ③
社会福祉学科 介護福祉専攻 ④

履修形態

必修科目 ①
選択科目 ②

学 年

① 1年
② 2年
③ 3年

! 記入は、必ず黒の黒鉛筆で、○の中を正確に塗りつぶして下さい。

2. 訂正する場合は、プラスチック消しゴムできれいに消して下さい。

3. 用紙を、折り曲げたり汚さないで下さい。

良い例



悪い例



下記の項目について、該当する番号をマークして下さい。

		評 価				
		5	4	3	2	1
		そう思う	やや そう思う	どちらとも 思えない	あまりそう 思わない	そう 思わない
Ⅰ 授業の あり方	(1) 授業の目的、目標が明示されていた。	5	4	3	2	1
	(2) 授業は計画的に展開されていた。(授業内容の構成や流れは適切であった。)	5	4	3	2	1
	(3) 授業の目的、目標から見て、授業の難易度は適切であった。	5	4	3	2	1
	(4) 教員から与えられた課題(宿題、レポート)は、質・量ともに適切であった。	5	4	3	2	1
Ⅱ 教え方	(5) 毎回の授業の量や進度は適切であった。	5	4	3	2	1
	(6) 教員は、学生の理解度に配慮して授業を進めていた。	5	4	3	2	1
	(7) 教員の授業に対する熱意が感じられた。	5	4	3	2	1
	(8) 教員は、学生の理解が深まるように授業を工夫していた。 (説明の仕方、授業形態、板書、配布資料、視聴覚機器など)	5	4	3	2	1
	(9) 教員は、学生に対して誠実に対応していた。(質問への対応、レポートへのコメントなど)	5	4	3	2	1
	(10) 安全についての指導や配慮が十分なされていた。(実習科目のみ回答)	5	4	3	2	1
Ⅲ 総 合 評 価	(11) この授業の内容は良く理解できた。	5	4	3	2	1
	(12) この授業は、新たに考えたり学んだりすることの多い内容であった。	5	4	3	2	1
	(13) 自分は、この授業を受けて、この分野に対する興味、関心が増した。	5	4	3	2	1
Ⅳ あなたの 取り 組み方	(14) 自分は、この授業に遅刻や欠席をしないように努めた。	5	4	3	2	1
	(15) 自分は、この授業を意欲を持って受講した。	5	4	3	2	1
	(16) 自分は、疑問点を必要に応じて教員に質問した。	5	4	3	2	1
	(17) 自分は、この授業を理解するために努力した。	5	4	3	2	1
Ⅴ 自 由 項 目	(18)	5	4	3	2	1
	(19)	5	4	3	2	1

授業内容、授業方法などに対する意見を自由に書いて下さい。

・ 良いと思ったこと、感心したこと

・ 改善して欲しいこと、付け加えて欲しいこと

・ その他、この授業についての意見、感想など気づいた点があれば書いて下さい

静岡県立大学短期大学部

ご協力ありがとうございました。

1. 3. 教員によるコメント作成方法

教員はアンケート結果を踏まえて、「教員によるコメント」を作成する。「教員によるコメント」は、シラバスの記載との重複を避け、昨年度までとは異なり「授業の目標・工夫など」の一項目とした。

その他の作成方法も含め、実施要領を作成し非常勤を含め全教員に配信した。

1. 4. 公表の目的と方法

上記は「教員によるコメント」として『平成 26 年度 F D 委員会報告』に記載し本学 web 上に公表する。

公表の主要な目的は、教育の根幹である授業が広い公共性を持つこと、およびその費用の大半を県費で賄っていること、この点に起因する公開責任と説明責任からである。本学で今年度行なわれた授業についての学生の評価に対して、教員がどのようにそれを受け止めて改善しようとしているかを報告書として可能な限り公表し、本学に課せられた社会的な責任の一端を果たそうとするものである。

2. 教員によるコメント

以下に、アンケート結果に対する教員によるコメントを載せる。掲載順は以下の通りである。

i) 専任教員

①一般教育等、②歯科衛生学科、③社会福祉学科社会福祉専攻、④社会福祉学科介護福祉専攻、⑤こども学科（学科等、専攻の中は職位順、職位の中は五十音順）

ii) 非常勤講師（五十音順）

今年度は遺憾ながら全員からの提出を得られなかった。不提出の二名分を除き掲載することにする。

学科:一般教育等 職名:教授 氏名:鶴橋俊宏
対象科目:言語と表現(講義)

この授業の目的は開設当時より一貫している。

言語は、人間の精神的・社会的活動の根源である。その言語のさまざまな側面について、主に母語たる日本語を対象として、言語学的方法でアプローチをすることにより、言語をいかに見るかの基礎を学ぶことを目的とする。具体的には「日本語は曖昧か(曖昧さとは何か)」「ことばの意味の諸側面」「ことばと論理性」「文と文章の構造」の四つの柱を立て、言語の本質と普遍性とを実際の言語活動に即して説明する。

工夫している点は、本学学生の予備知識に合わせて独自にテキストを編んでいること、受講学生とコミュニケーションをとりながら講義を行うことである。受講者の評価はおおむね高かった。これは教員側の努力だけではなく、受講者の姿勢、クラスの雰囲気など学生の資質によるところが多く、受講者諸君の積極的な授業参加に負うところが大きかったと言えよう。

学科:歯科衛生学科 職名:准教授 氏名:館山光一
対象科目:統計学入門(講義)

例年 20 名前後の受講生で、若干問題のある学生もいるが、好奇心も旺盛でやや難易度の高い内容にも理解しようという意欲がみられる者もかなり見受けられる。本格的な数学の準備をすれば、科目名から「入門」の2文字をとることが可能なレベルの学生達と思われるだけに、半期だけの授業であるのが残念である。

今年度のアンケートでは、苦情を述べる者も無く、やや拍子抜けの感がある。次年度は、もう少しレベルを上げて苦情が出るくらい苦しめるべきかもしれない。

学科・専攻：一般教育等 職名：准教授 氏名：林恵嗣

対象科目：体育実技（実技）、健康科学論（講義）

【体育実技】

授業の目的・目標は、1) 学生が将来的に運動を継続していく意欲を持つようにすること、2) 体力を維持・増進させること、そして、3) 気分転換を図ること、等である。これらの目的・目標を達成するために、施設・設備面や安全面を考慮した上で、学生が希望した運動（スポーツ）を行った。全学科・専攻において、全ての項目で学科・専攻平均点を上回っており、良い評価が得られたと考えている。より良い評価が得られるよう、今後も学生のニーズに合わせられるところは合わせながら授業を実施していきたい。

学生への要望：授業中であっても、授業内容についての要望があれば遠慮なく言ってほしい。対応可能なことであれば、対応していきます。

【健康科学論】

授業の目的・目標は、1) 健康と運動の関連性についての理解を深めるとともに、安全かつ効果的に健康の維持・増進のために運動を行う方法を理解すること、2) それを理解するために必要な知識（主に生理学的な内容）を学ぶこと、である。昨年度と同様に、歯科衛生学科では全ての項目で学科・専攻平均点を上回ったが、社会福祉専攻・こども学科では下回った。歯科衛生学科では、選択科目であるため興味を持っている学生が履修をすることになるが、社会福祉専攻・こども学科では、保育士資格や幼稚園教諭免許の取得に必要となるため、理科系の科目が苦手であったり、興味・関心がなかったりしても履修せざるを得ないことがあるためと推察される。したがって、この傾向は今後も続くものと考えられる。

学生への要望：質問や分からないことがあれば遠慮なく聞いてほしい。授業以外の時間でも対応します。

学科:一般教育等 職名:講師 氏名:有元志保
対象科目:英語(演習)

英語の授業では、受講者が高校以前に培った語彙や分法知識を定着、増強するとともに、幅広い題材を扱うことにより、広い視野を身につけることを目的としている。今年度は、アメリカを中心とした世界の国々の文化や社会について、比較的平易な文章と、英語学習者のために編集されたニュース映像で学ぶテキストを使用した。

授業では、口頭と板書によりわかりやすい説明をこころがけ、学生同士のペアワークによって文章を訳してもらうなど、不明な箇所が残らないよう努めた。字幕をつけたり消したりしながら、映像を繰り返し視聴する時間も設けた。英語の音に慣れてもらうことがその目的であったが、事前に十分な予習を行い、映像をあらかじめ視聴している受講者からは、何度も同じものを繰り返す必要はないという意見もあった。

定期的実施したテストの結果からは、多くの学生が授業内容を理解し、復習も行っていることがうかがえた。その一方で、期待した到達度に達しない学生も一定数存在した。クラスにより受講者数がかなり異なるだけでなく、受講者間の習熟度のばらつきもあって、計画通りに一定の進捗で授業を行うことの難しさを感じた。この点については、今後の課題としたい。また、通年で一冊のテキストを使用することにより、特に後期になると授業の進め方がルーティン化してしまう傾向があることも反省点である。受講者の興味を引き付けられるよう、さらなる工夫が必要であると感じている。

学科・専攻:一般教育等 職名:講師 氏名:野嶋秀子
対象科目:生活の化学(講義)

【授業の工夫など】

大学での教養教育は、高等学校課程までの教育を基礎として行われるが、理科について言えば、高校課程「化学基礎」あるいは「化学」を未履修で本学に入学する者は少なからずいる。平成 28 年度に「生活の化学」を履修した学生の 88%は「化学基礎」を、41%は「化学」を履修していたが、6%の学生は全く履修無しであった。この未履修者に対して補講(時間数にして約 5 時間)を行った。この科目の目標は、「化学をより実践的に行い(実験を行い)、観察し、自分で考え、考えを適確に他者に伝えるために工夫して表現すること」である。そのために、①教科書は定めたが、特に必要とする部分は手作りのプリントを与えた。②レポートの様式を学生に与えた。③提出物を丁寧に読み、添削し返却することに力を注いだ。特に、対象事象をよく観察して判断を下すこと、および言語で適切に表現することに、その熟練度が高まるように働き掛けた。④決して事故のない実験を目指し、注意点を与えた。

【授業についての自己評価】

① 履修者数; 歯科衛生学科 1 年 15 名 (38%)、社会福祉専攻およびこども学科 1 年 2 名 (4%) であった。学生にアンケートをとると、約 80%が「数学・物理学・化学は好きではない、不得手である、嫌いである」と答える。社会福祉学科の選択者が少ない理由である。教員に学生が見える以前の問題である。

② 実験について; 本学の学生は理論を突き詰めるよりも体を動かして行う実験を好む。また、高校までの段階できちんとした実験をしたことがない学生が大半である。8 回の実験を行い、特にその説明に時間をかけ懇切丁寧な実験を心がけた。また、殆ど個人指導でレポートの添削指導を行った。結果、回を追う毎にレポートの記載方法および記載事項が充実したものに变化した。目的・目標をある程度達成できたものとする。アンケートの結果より、「化学実験はその理論を理解するために有益である」とし、「化学実験のレポートをまとめることは有意義である」けれども、レポートの質・量については不評であったことが明らかになった。

③ 実験に関する自由記述が多くあった。中和滴定と吸光度の測定は面白く役に立つ、マヨネーズ作りおよび石鹼の合成の実験は面白いと評価された。本学の学生には、実験を通して化学の面白さを伝えることが適切な方法であるとする。

【今後の改善・工夫】

過去、「化学は面白い」を学生に押しつけてきた、価値観の押しつけをした嫌いがあると気付き反省した。そこで 2015 年度からは、個々の学生の中にある化学の才能をより増幅させることに留意することにした。具体的には、課題が達成できたときには「学生とともに喜ぶ」ことにした。このやり方は、とても時間を要するのであるが、学生が教員に対

して負の感情を抱くことが少ないのではないかと考える。この方向を堅持してゆく所存である。

アンケートにおいて、実験が楽しい、実験のレポートが難しい、等の自由記述が多くみられ、実験が学生にインパクトを与えたことが明確になったので、引き続き実験を多く取り入れる。

【学生に期待すること】

化学を学ぶときには、第一優先は「自分で考えること」にしてほしいと考える。そのためには先人の遺産をよく読んでほしいと思う。「読書百遍、意自ずから通ず」という言葉を進呈する。

学科: 歯科衛生学科 職名: 教授 氏名: 有泉祐吾

対象科目: 病理学(講義)、歯科材料学(講義)、口腔病理学(講義)、歯科保存学(講義)、臨床歯科医学特論(講義)、災害時歯科保健(講義)。救急処置法(講義・演習)、歯科材料学実習(実習)

I 授業の目標・工夫など

災害時歯科保健以外のすべての担当科目は、歯科衛生士教育における専門科目であるため、講義科目においては、それぞれの科目での最低限の知識を修得させることを、また、実習科目においては、講義科目における基礎的知識の理解度を、実習により深化させることを目標とした。なおその際に、歯科衛生士が医療従事者の一員であることを認識させるよう図ったことも、例年通りである。

そのため今年度も、講義科目においては講義の要点をプリントとして、それに穴埋め形式で記載していく方式を、主として採用した。また、講義においても、近年とみに増加している『実際に、手に取ってみなくては、あるいはやってみなければわからない。』という要望にできる限り応えるために、実物の提示を図った。さらに、今年度も一部の教科においては動画による提示も行い、理解度の深化を図った。また、実習にあたっては、機器や材料の進歩発達に合わせ、時流に沿った実習となるよう検討し実施した。

一方、今年度も原則として、授業の終了前に当日の講義内容確認のための小テストを、実習においては宿題として実習における理解内容の自己評価と、疑問点あるいは感想等の記載を実施した。これは、その授業、実習での学生自身の理解度の深化と、また私自身のその授業、実習での学生理解度確認の指標の一つと考えて行っている。そして、これにより確認された理解不十分な点や質問等は出来得る限り、次回の講義あるいは実習時に回答や解説、追加資料の配布を行い、理解が確実となるよう配慮したことも、例年の通りである。

II 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

今年度の評価結果を見ると、概ね科目間での評価に大きな差異はみられなかったが、若干前期科目と後期科目とで評価に違いがみられた。また、授業内容の理解度において、ごく一部の学生ではあるが、不十分ではないかと窺われる結果となったことも例年の通りである。

ところで、今年度は、特に災害時歯科保健に関して記載したい。本科目は、選択科目であり、3年次前期に開講されている。3年次ということで、ある程度、歯科衛生の内容を理解している学生に対して、災害時における歯科衛生の意義と目的とを理解し、被災者に寄り添う者として歯科衛生の理論・技術を活用する態度を養うことを目的としている。そこで、今年度は、模擬アクティブラーニングとして例年よりも積極的に自己学習を基とした形態としたところ、アンケートで、『災害が起きた時には歯科衛生士としてこうするんだよ、というような、教えてもらえる講義を期待していた。』との、指摘を受けた。初回時に、本講義

の目的、方法等を説明したが、不十分であったようで、来年度のシラバスには、本項目に関して具体的な明記をしなくてはならないと反省させられた。

また、例年記載しているが、この授業評価アンケートをさらに有効活用するためには、学生個々のアンケート項目間の関係提示も必要なのではないかと思う。

学科：歯科衛生学科 職名：教授 氏名：仲井雪絵

対象科目：①臨床歯科医学序論（講義）、②小児歯科学（講義）、③口腔発達学（講義）、④口腔衛生学Ⅰ（講義）、⑤口腔衛生学Ⅱ（講義）、⑥臨床歯科診査法（講義）、⑦救急処置法（講義・複数教員分担）

I 授業の目標・工夫

歯科衛生士国家試験の合格は教育目標の最終ゴールではなく **minimal requirement** と捉え、もっとその先の歯科医療現場での実践に役立つように「知識」を「知恵」として修得させることを念頭に置いた教育を実施した。自分は前年度まで岡山大学歯学部で歯科医師として臨床の最前線にいたので症例の口腔内写真やエックス線写真等を多く所有している。それらをふんだんに使用し、臨床をイメージさせながら学修できるよう努めた。授業内容は、コアカリキュラムを意識しつつもアカデミックフリーダムな部分として歯科界での最新トピックを盛り込んだ。前職時代に複数の歯科衛生士養成校で非常勤講師を長年担当した折の経験をもとに、本学にて初めは講義スライドの配布資料を使わなかった。なぜならそれで十分な学修効果を上げてきた実績があるからである。ところが本学科の学生の特性として気が付いたのは、配布資料が無ければ授業内容の理解度が低く、ノート記述もおぼつかない学生達が存在することであった。そこで2回目以降毎回配布資料を作成し、穴埋め形式で授業中に記載させる方法を採用した。医療面接や患児への対応に関する授業では、実際の現場の動画を駆使し飽きさせない仕掛けづくりに努力した。さらに、企業や研究に従事している歯科衛生士を外部講師として招待し、歯科衛生士というキャリアへの憧れと期待値を向上させて学修への動機づけをも図った。

II 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

新任教授として本学科の学生からどのような評価を受けるのか楽しみであった。学生による授業評価アンケート集計結果を供覧すると、「I 授業のあり方（5点満点）」は①4.78, ②4.81, ③4.73, ④4.71, ⑤4.88, ⑥4.92, 「II 教え方（5点満点）」は①4.89, ②4.85, ③4.73, ④4.78, ⑤4.92, ⑥4.92, 「III 総合評価（5点満点）」は①4.84, ②4.78, ③4.73, ④4.68, ⑤4.83, ⑥4.85 と、有難いことに全て学科平均点を上回る点数を得た。これらの評価は面目躍如たる結果として胸を撫で下ろしている。

とにかく本年度は年間を通して授業準備・教材準備に追われた毎日であり、講義スライドと配布資料を作成することに精一杯で、アクティブ・ラーニング等の教育手法をもって授業企画する余力が少なかったことは反省すべき点だと思う。そこで、来年度は机間巡視、ミニッツ・ペーパー、ラウンドロビン、CBLなどを少しずつ導入し、可能であればeラーニングの環境を整えたい。いずれTBLを実施したいと考えている。⑥の臨床歯科診査法の授業コマの中に医療面接のロールプレイ演習を導入することも検討している。そのファシリテーターとして、歯学部教育における共用試験機構の医療面接教育で名高い教授陣を外部講師として招待することを現実的に企画・交渉中である。

Ⅲ 学生に期待すること・学生への要望等

学校で教わることが、あなた方の学ぶべき全てではありません。未知なるものに対して謙虚に食欲に勉強する積極性を失わないでください。自分が一度も見聞したことも使用したこともないものを根拠無く批判するような「食わず嫌い」にはならないでください。かと言って、無批判で全てを受け入れないでください。批判的吟味する判断力を常に忘れず、その上で良いと判断できるものを即受け入れる柔軟性を養っていただくことを期待しています。

学科:歯科衛生学科 職名:教授 氏名:吉田直樹

対象科目:生化学(講義)、口腔生理学(演習)、口腔微生物学(講義)、微生物学(講義)、
歯周治療学(講義)、歯科衛生統計学(講義)

I 授業の目標・工夫など

本学歯科衛生学科は、歯科衛生士養成機関でもある。学生は卒業時に「短期大学士」の学位とともに「歯科衛生士国家試験受験資格」を取得する。

自分の担当科目は国家試験の内容に直結している。「授業において、全ての学生が国家試験に合格するために必要な知識を確実に伝え、十分に理解させる」ことを一つの大きな目標としている。そのためには、教科書に記載されている内容に関して、要点を簡潔に伝えることを心がけている。

しかしながら、講義においては、単に教科書に記載されている知識を与え、学生は、それを得るということに留まらないようにと考えている。いわゆる詰め込み教育となってしまうのは、学生が「自主的に学ぶ」という機会を奪ってしまうことになり、将来、一部の学生が、「受け身」の姿勢で学ぶことから抜け出せなくなってしまう恐れがある。学生は卒業後、学問を続けて行くこととなる。それは、在学している時間よりも卒後の時間の方がはるかに長い。したがって、学生ひとりひとりが、短期大学において「学問をした」という実感を卒業後にも永く持ち続けられるような内容の授業を行いたいと考えている。日常の授業において、学生ひとりひとりが「自分は学問の場に身をおいている」という実感を持てるようにすることを心がけている。学生自身が「学問」をしているということを感じられること。つまり、それぞれの科目が、学問としての体系を有していること、先人達の研究によるエビデンスの蓄積が教科書に記載されているということ、そして、それは現時点のものであって、将来的には変化して行く可能性も、あるということを理解させるように努めている。

授業を理解しやすくする工夫としては、PowerPointや動画の活用、重要な項目の板書を行っている。一方通行になりがちである講義の中で、ポイントとなる部分では、時々、学生に対して直接質問をするようにしている。

また、90分の講義時間を前半と後半に分け、途中で質問を受ける時間を設けるようにしている。そのことにより、学生の集中力が90分x1では無く、45分x2に変更され、より高い集中力で講義に臨めるようにという工夫のつもりである。

学生に配布している紙ベースのレジュメに関しては、重要語句の部分などを空白にして、学生が書き込んで完成する様式を用いることにより、やはり学生の集中力が維持されるように工夫している。

II 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

学生による授業評価アンケートの結果に関しては、概ね良好であったと考えている。今後の改善点としては、「手書き」を行う際には、丁寧に書いて、学生が読みやすいようにしな

ければならないと感じている。

Ⅲ 学生に期待すること

学生に対して、教員が内容をまとめるのではなく、学生自身で、「講義の内容をうまくまとめて、自分なりにノートすること。」は、最初は高い要求とを感じるかも知れない。そこで、レジュメに関しては、重要語句などを空白にしておき、学生が書き込んで完成する様式を多く用いているのであるが、このような形態の講義に慣れてしまった学生は卒業後、はたして、自ら考えることができる人になれるのか、不安を感じる。やはり、自分自身で能動的にノートをとることを学んでほしいと希望する。

できるだけ、学生には、難解なものに挑戦させて、自らの力で理解して行こうと努力する時間を充分に与えたい。学生が「自ら考えることによってやっと理解できた。」という喜びを得られる機会を多く持てるようにしたい。

ところで、学生にとって理解しやすい授業を行うという方向に多くの教員が向かうことに関して、良い点だけだとは考えにくい。学生にとって「わかりやすい」授業は良い授業であるのかも知れない。しかしながら、学生が、「わかりにくい」ということを、教える側の教員が悪いということにしてしまい、「わからない」ということを自身で解決しようとする風潮は、問題ではなかろうか。全ての授業が、理解しやすい授業ばかりになってしまうことは、本当に望ましい状況と言えるのだろうか。

わかりにくく表現されたものを、何とか理解しようと学生が努力することは重要な知的活動となると思う。実は、社会人になってからは、そのような能力は無くてもならないものだと思う。

学生には、わかりにくいものほど、「面白い」、「挑戦してみたい」、という気持ちを持ち続けてほしいと思う。

学科・専攻: 歯科衛生学科 職名: 准教授 氏名: 木林美由紀

対象科目: 学校歯科保健論(講義・演習)、学校歯科保健実習(実習)、マネジメント論(講義・演習)

授業の目標・工夫など

学校歯科保健は、生涯にわたり口腔の健康を保持増進するために必要な継続的な口腔保健管理の中に位置付けられている。学校歯科保健論では、子どもの社会的環境、全身の成長及び口腔状態を把握し、心身ともに健康を支援する意義及び目的や方法を習得するため、アクティブ・ラーニングを取り入れた学生主体の授業構成で展開している。事前学習を課し、グループで課題に取り組み、限られた時間内に各人の意見をまとめるスキルや集約する力を養い、効率的でわかりやすいプレゼン構成及びプレゼンテーション力の習得に努めた。学校歯科保健実習は、学校歯科保健論で習得した知識及び情報を活かし、歯科保健の知識や技術を身に付け歯科保健習慣の育成や定着に適した園児や児童に対し、自律的な健康の保持増進確立のために、学生が歯科保健指導計画を立案し、指導案・指導教材を作成し、歯科保健指導の学外臨地実習の準備に取り組んだ。マネジメント論は、歯科保健医療者として、職業集団や他業種者らと良好な人間関係を構築・維持し良質な医療ケアを提供するために、各人が持ち合わせる資質及び機能を駆使し、組織の成長と発展に繋がるマネジメント能力を修得することを目的に講義を展開した。トレーニングツールなどを活用して、より身近でわかりやすい具体的な実践例を可能な限り提示し、理解を深めるよう努めた。

授業についての今後の改善・工夫及び学生へ期待する事と要望

学校歯科保健論と学校歯科保健実習は連携した科目であり、3年次の臨地実習を前倒しして、教育施設の見学実習を学校歯科保健実習の枠内で実施し、指導実習を2年次終了時の春休みに実施する。そのため、学校歯科保健実習の講義数はタイトになるが、1講座の時間を調整し定められた講義時間数以上の実習時間を確保している。また、これらの事情は前期の授業時に詳しく重ねて丁寧に説明しているので、学生も自ら計画を立てて授業に臨むことを強く希望する。学生が作成する指導内容に関しては、児童の発育段階を踏まえ、教育現場でのルールを尊重し、細心の配慮を払って取り組まなければならないことを学んで貰いたい。さらに、現場が求める要望を理解し、柔軟な姿勢で対応できる力を習得してほしい。また、指導担当学年・クラスの配分は、学生への事前調査を行い、全て希望通りに配分したので、各人がチームの一員としての自覚を持ち、真摯に真面目に取り組むことを希望する。学校歯科保健実習で、地元放送局や新聞社がこども園・小学校での実習の様子を取材し、報道番組で放映され紙面に写真入りで掲載されたことは、学生と実習現場の貴重な経験となった。このことは、県立大学の社会貢献と地域活動のアピール、歯科衛生士の社会的認知度向上に貢献したと考える。授業毎の振り返りシートを用いて、質問に対応し授業内で解決できなかった事柄を丁寧にフォローし、授業における要望や意見も汲み取り、必要に応じ改善

に努めている。最終講では、授業内容の復習・要点を過去の国家試験問題と関連させた設問集を配布し、国家試験を身近に感じ早期取り組みへの一助とすべく工夫を図った。今後も設問内容を充実させ継続する計画であるので、活用を期待する。

学科・専攻: 歯科衛生学科 職名: 准教授 氏名: 鈴木温子

対象科目: ①高齢者歯科学(講義)、②歯科衛生士業務記録法(講義)

③障害者歯科保健介護論(講義)、④障害者歯科保健介護実習(実習)

1. 授業目標・ねらいについて

<講義科目①～③共通のねらい>

- ・高齢者のもつ身体的、精神的および社会的特性を理解する
- ・障害高齢者の歯科疾患や口腔機能低下を理解する
- ・食べる機能のメカニズムと全身との関係を理解する
- ・介護予防事業と口腔機能向上プログラムを理解する
- ・POSに基づく業務記録記載の意義と必要性を理解する

<実習科目④ねらい>

- ・障害高齢者の心身の状態を把握ための介護導入法の基本を実践できる
- ・見守りから全介助まで障害の程度による口腔介護法の基本を実践できる
- ・口腔機能を向上させるための口腔リハビリテーション法の基本を実践できる
- ・摂食・嚥下機能を活性化するためのリハビリテーション法の基本を実践できる
- ・義歯の取り扱いについての介護法の基本を実践できる

2. 自己評価結果の考察と今後の課題について

1) 主たる評価項目である「Ⅰ 授業のあり方(4項目)」、「Ⅱ 教え方(6項目)」、「Ⅲ 総合評価(3項目)」の平均点数は、①高齢者歯科学では 4.92、4.87、4.87、②歯科衛生士業務記録法では 4.85、4.84、4.76、③障害者歯科保健介護論では 4.86、4.88、4.82、④障害者歯科保健介護実習では 4.60、4.66、4.60 で、すべての項目において学科平均点を上回った。

2) 昨年は「スライドが見にくい」等の意見があったため、今年度は早速プロジェクターを新機種に更新するなどして改善を図ったが、今回は「ゆっくりスライドを変えて欲しい」などの意見があり、「その都度言うように」という授業中のこちらの計らいがなかなか伝わりにくいことがわかった。ただ 4 科目共に評価点が学科平均点を上回ったことは、昨年の評価をふまえて授業を工夫したことが評価につながったのだと思われた。

3) 自由記述欄については、「2 年の後期に行なった授業を 3 年の実習科目で実習することによって身につけることが出来た」「食事の介助など歯科の分野にとどまらず介護のことも知ることが出来て良かった」「ファイルを配布してくれたのでレジュメの整理がしやすかった」「先生の作るレジュメが見やすく好きでした」といった嬉しい評価をもらい、今後授業を進める上で大いに励みとなった。反面、前述したように「スライドをもっとゆっくり変えて欲しい」「字が小さくて書き取るのが難しかった」といった指摘も昨年に引き続きあり、よかれと思って工夫を凝らしてはいても、すべての学生に真に満足してもらえる授業のあり方の難しさを改めて痛感した。

3. 授業評価について学生への期待

今回も学生の点数評価や自由記述をじっくり読み込み分析することで学生の言わんとしてい

ることがストレートに伝わって来る。時々学生達から「こんな評価しても自分達には反映されないから」というつぶやきが聞こえてくるため、後輩の学生達へ確実に改善された授業内容が引き継がれていくからどうか真実を評価するようお願いしている。願わくば授業の度毎に忌憚のない意見を聞かせてもらいたいというのが個人的な気持ちである。口頭でも無記名であってもなかなか教員への要望が出てこないのが実情で非常に残念なことである。

毎年思うところであるが、この教員評価システムの目的についてももう少し学生にきちんとした説明が必要のようにも思われる。その上で、このシステムが形骸化することなく今後も続けられて行くことを期待している。

学科・専攻: 歯科衛生学科 職名: 准教授 氏名: 野口有紀

対象科目: 歯科衛生学総論(講義)、地域歯科保健論(講義)、地域歯科保健実習(演習)

I 授業の工夫など

専門分野における知識・技術・態度を取得し、授業の役割の明確化する運営を目標とした。基礎と専門科目、座学と演習・実習などの多方面の授業内容の連携をはかり、実践する能力を修得する組み立てとした。

- ・ 動機付けの工夫として、現場の情報・体験情報・最新の調査結果および原著論文を取り入れた理論と実際のマッチングを意識した授業運営を行った。
- ・ 概念理解の形成を助ける工夫として、図・写真・グラフなどを活用した教材を使用した。
- ・ 学習意欲を高める工夫として、理解度・反応がわかるよう講義終了ごとに小テストを行った。小テストは国家試験に準じた形式で行った。答えあわせおよび解説を行い、理解の確認と定着を図った。
- ・ 授業参加を促す工夫として、授業中の理解度を成績評価に反映させた。
- ・ 情報技術活用の理解と工夫として、視覚教材を用い、書き込みをかねた資料として配布した。
- ・ 問題発見・解決能力を高める工夫として、ケース・メソッド、社会と連携した最新の情報・調査結果を取り入れた授業の実施に努めた。
- ・ 理解度に合わせた指導の工夫として、質問事項を用紙に記載し提出し、対処した。
- ・ 成績評価の工夫として、筆記試験に偏向しない多元的成績評価をした。

II 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

各科目の授業アンケート集計結果の「I 授業のあり方」「II 考え方」「III 総合評価」平均点は概ね 4.50 以上で、全項目が良好であった。学生主体授業の取り組みなどにより、興味・関心を持ち、理解が深まったと思われる。平成 29 年度も同様の手法を用い授業展開を図っていく。さらに、学習意欲を高め、理解力が深まるよう下記について改善・工夫に努めたい。今後の改善点として、「疑問点を必要に応じて教員に質問した」の項目の平均点が、他の項目に比べ低い傾向であった。学生全員が質問できる環境づくりとして、授業ごとに質問事項を用紙に記載提出をする時間が短かった。平成 29 年度は記載提出する十分な時間を授業内に設けるなど改善していきたい。小テストを授業内に行っていたが、さらに学習意欲を高める工夫として課題として行うなどより効果的な取り組みを行う工夫をしていきたいと思う。今後も、学習意欲を刺激し、分かりやすい授業運営が出来るよう努めたい。

III 学生に期待すること・学生への要望等

予習・復習の課題設定を含め、授業内容をよりよく理解し実践に役立てることができるようにして欲しい。

学科: 歯科衛生学科 職名: 講師 氏名: 海老名和子

対象科目: 歯周疾患予防処置論(講義)、歯周疾患予防処置実習Ⅰ(実習)、歯周疾患予防処置実習Ⅱ(実習)

I 授業の工夫点

「歯周疾患予防処置論」は、11年後期に開講する講義科目ではあるが、歯周疾患予防処置実習が効果的に行えるように、超音波スケーラーや歯面研磨などの体験実習やスケーラーの基礎的操作も授業に取り入れている。実際に器具・器材を用いて体験することで理解を深めている。2年次の「歯周疾患予防処置実習Ⅰ」ではスムーズに実習に繋げている。

「歯周疾患予防処置実習Ⅰ」、「歯周疾患予防処置実習Ⅱ」では、マネキン実習と相互実習で、授業時間を変則的に変えている。これにより、効果的な授業になっていると考える。実習は、常に歯科衛生士教員6名体制で行い、示説、机間巡視して個別指導を行う等、充実した教育体制となっている。実習前には参加教員で打合せを行い、実習内容や示説内容を確認し、教員の意思統一を図るようにしている。また実習科目については、筆記試験だけでなく、実技試験を実施している、不合格者に対しては、各教員が個別に実技指導を行うなどし、学生の技術の向上を図っている。

II 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

平成28年度の授業評価は、「授業のあり方」が3科目平均4.73(4.66,4.74,4.80)、「教え方」が3科目平均4.72(4.64,4.76,4.77)、「総合評価」が3科目平均4.74(4.67,4.77,4.77)という結果で、前年度と同様にかなり高評価であった。

過去8年間(2009-2016)の平均と比較しても、大項目は全て、ほとんどの小項目が8年間の平均以上であり、かなりの高評価であった。特に大きく変更した点はないが、前年度の反省点を踏まえ、授業内容を多少変更していく予定である。

また、「あなたの取り組み方」については、3科目平均4.74(4.61,4.79,4.78)と高く、過去8年間でも最も高い評価であった。学生の授業への取り組み方が例年より良かったという実感はなかったが、実習では他の科目に比べかなり高くなっている。実技試験前に自主練習をするなどしていたこともあったためと思われる。

自主練習の際に学生から要望があった場合は、個別に実技指導も行っていきたい。

学科・専攻: 歯科衛生学科 職名: 講師 氏名: 中野恵美子

対象科目: 歯科診療補助論(講義)、歯科受療支援論(講義)、歯科診療補助・支援実習Ⅰ(実習)、
障害者歯科学(講義)、口腔介護予防・リハビリテーション法(講義・演習)

「歯科診療補助論(1年後期)」「歯科受療支援論(1年後期)」「歯科診療補助・支援実習Ⅰ(2年前期)」「口腔介護予防・リハビリテーション法(3年前期)」は、歯科衛生学教育カリキュラムのうち、専門分野の「歯科診療補助論」に属する科目である。学生が1年次に基礎知識を学び、2年次に実習を通して主に臨床における患者支援に必要な実技と歯科医療安全管理を習得するとともに、1～3年次の科目を通し、地域において歯科衛生士がクライアントのQOLの向上にどのように貢献することが期待されているのか、その背景およびクライアントや他職種との役割分担、連携について理解することを目標とした。

「障害者歯科学(2年後期)」では、学生が障害者と障害者歯科についての理解を深め、歯科衛生士として求められる歯科的支援を行うための基礎的知識を身につけることを目標とした。継続課題である能動的な学習姿勢の構築のため、講義科目は初回にグループワークを実施して授業の目的および学生と教員が一緒に授業をつくることを意識させるとともに、学生が毎回シートに記入する意見・質問・感想等を次回以降の授業に反映させるようにした。また、「歯科診療補助・支援実習Ⅰ」においては、形成的評価として夏期休暇前に実技試験を行うとともに、学生が自主的に学習しやすい環境づくりを心がけている。

「歯科診療補助論」「歯科受療支援論」「歯科診療補助・支援実習Ⅰ」「障害者歯科学」「口腔介護予防・リハビリテーション法」の平成27年度授業評価アンケート結果は、「Ⅰ授業のあり方」の平均点はそれぞれ4.89、4.90、4.94、4.81、4.68、「Ⅱ教え方」の平均点は4.87、4.91、4.92、4.85、4.69、「Ⅲ総合評価」の平均点は4.78、4.85、4.91、4.80、4.59、「Ⅳあなたの取り組み方」の平均点は4.77、4.79、4.86、4.69、4.49であった。27年度と比較すると、昨年度上昇した1年次科目の「歯科診療補助論」「歯科受療支援論」のポイントがやや下降し、2年次科目のポイントはやや上昇した。3年次科目は昨年度とほぼ同様であった。1年次科目については、例年どおり学生がシートに記入した内容を理解度の参考とするとともに、学習した内容に関連した歯科衛生士国家試験問題や器材の実物を紹介し、学生が学習内容に興味を持てるようにした。なお、対象科目において、Ⅰ～Ⅲについては「2.あまりそう思わない」以下の回答はみられなかったが、「Ⅳあなたの取り組み方」については、「自分は、疑問点を必要に応じて教員に質問した」は2科目計2名にそれらの回答がみられた。一方、「自分は、疑問点を必要に応じて教員に質問した」に「5.そう思う」と回答した学生の割合は、4科目で上昇した(歯科診療補助論: 66.7%→75.0%、歯科診療補助・支援実習Ⅰ: 72.5%→78.4%、障害者歯科学: 47.4%→62.9%、口腔介護予防・リハビリテーション法: 40.9%→43.6%)。3年次科目の回答割合は前年度より上昇したとはいえ微増であるため、能動的な学習姿勢の構築および維持は継続課題としたい。

学科・専攻: 歯科衛生学科 職名: 講師 氏名: 森野智子

対象科目: 歯科保健教育法(講義)、歯科衛生倫理(講義)、コミュニケーション演習(演習)、歯科診療補助・支援実習Ⅱ(実習)

I 授業の目標・工夫など

これまで同様、授業の目標は「根拠のある知識を身につけ、論理的な思考力を育み、さらに行動に繋げること」とし、多くの内容を盛り込んで授業を組み立てた。

上記の目標に基づき、具体的には、1 年次の概論科目では新入生でもわかり易い到達目標を示すことにした。2 年次の授業においては、歴史的な事実から現在進行中の事例まで、数多くの情報を紹介した。演習においては、思考の機会を設け、考えながら手法や技術が定着することを通し、後期の学内実習で総まとめできるようにデザインした。授業に際して、根拠を明確にした説明を大切にしながらも、身体や心を動かす機会を持つような授業の提供に努めた。

過去に学生の参加評価が低い傾向があった、概念を伝える科目においては、視聴教材を導入することで改善が図れているので、昨年度も引き続き同様の授業を行った。

II 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

「歯科保健教育法」「歯科衛生倫理」「コミュニケーション演習」「歯科診療補助・支援実習Ⅱ」の授業評価アンケート結果は「I 授業のあり方」の平均点はそれぞれ 4.82、4.84、4.93、4.90、「II 教え方」の平均点は 4.90、4.86、4.93、4.91、「III 総合評価」の平均点は 4.82、4.82、4.93、4.87 であった。前年と比較して「歯科保健教育法」の評価はほぼ同等で学科平均と比較して高かった。これは歯科保健指導を取り入れることで教育効果向上を目指した成果が、学生評価に現われたと感じる。「コミュニケーション演習」もほぼ同等で高かった。これは、教員が 2 コマ続きの演習運営に慣れたことが原因だと考える。「歯科衛生倫理」も同等で高かった。授業の内容が心理的に重い上に解決方法が不明確なテーマであり難しい授業だが、今後医療従事者を目指す学生にとっては、しっかり学ぶ必要がある授業内容なので、教員の狙い通りに授業を進行して、引き続き学生の意欲を高める授業準備を心がけたい。

「IV あなたの取り組み方」の平均点は 4.70、4.74、4.80、4.85 で、前年と比較して全体的に、0.05、0.09、0.01、一昨年と比較すると、0.11、0.27、0.19(歯科診療補助・支援実習Ⅱは資料なし)と改善している。これは、アクティブラーニングを意識した授業展開につとめて、学生に事前の調べものを課した効果があったと考える。一昨年度の改善して欲しいこととして、「まとめや感想を書いている時に話をされると、まとめに集中できないので、あまり話をしないでほしい」という意見があったので、昨年度は学生が書き物をしている時に話をしないようにした。その結果、学生はまとめや感想の記述に集中でき、効果的な学習が出来たと感じる。

歯科衛生学科の学生は、歯科保健指導に対する興味を持っているものの実際に指導を受けた経験が少ないことから、大学教育においても早期に歯科保健指導の機会を与える必要性を感じた。今後も、学生の日常や背景を理解することで、ニーズにしっかり答えるような教育を行いたい。

学科・専攻: 歯科衛生学科 職名: 講師 氏名: 山本智美

対象科目: 歯科予防処置論(講義)、感染予防法(演習)、齲蝕予防処置実習(実習)

I 授業の工夫、自己評価

「歯科予防処置論」: わが国における口腔保健の現状をデータなどにより把握した上でう蝕、歯周疾患の原因と予防、プラークコントロールの実際(方法、道具)、歯垢染色実習等、自分の目で観察したり手に取り実習を行うことにより口腔保健管理の必要性への理解が深められたと思われる。ライフステージにおける口腔保健管理については教員の体験談も含め、妊産婦期、乳幼児期から老年期まで事例をもとに、人々の生活、生活背景と口腔を関連付け口腔疾患の予防の必要性に対し興味、関心をもつことにつながったと思われる。

「感染予防法」: 医療安全において感染予防対策は必須であるが歯科医療になぜ感染予防が必要か、身近な感染症やその予防対策について考える機会をもつことから始めた。B型、C型肝炎の感染やそれらの訴訟問題を考えることを機会とし、事前課題レポートを毎年課している。結果、感染予防への興味が増した、予習により理解が深まった等、よい効果がみられた。また、感染予防の基本である手洗い実習ではハンドスタンプにより手指の汚染状態を確認し、ブラックライト下での手指の汚れの観察により手洗いの重要性を理解できたと思われる。滅菌・消毒・洗浄の実際を実習室の機械、器具で体験しDVD視聴により歯科医療における感染予防の必要性を理解できたと思われる。

「齲蝕予防処置実習」: 実習前の講義では、目的、基本的な知識、術式、使用器具、注意事項等を映像と実物の回覧により理解が深められるよう努めた。また今年度は PMTC (専門家による機械的歯面清掃) の模型実習 (マネキン) を追加した結果、PMTC の手順やポイントを模型上で体験でき、相互実習にスムーズに移行できたことが学生のレポートから把握できた。また、う蝕予防処置の対象は小児であることが多いため、患者は小児であることを想定し、声かけ、対応、説明を相互に体験してもらった。学生の実習考察レポートからは、コミュニケーションの大切さを体験により実感したことが読み取れた。実習中はモニターに手順、注意事項を写し出し、その都度確認できるように工夫した。また実習では教員(非常勤含む)を4人配置し、安全への配慮も適切に行った。

アンケート集計結果ではいずれの科目も平均点は4.5以上で評価は高かった。授業の感想や提出レポートに対しては、毎回コメントを記入し、学生一人ひとりへの丁寧な対応を心がけた。

II 今後の改善・工夫、学生に期待すること

3科目の内容は歯科衛生士の業務を行う上で根幹をなす部分である。一方的な授業にならないよう学生が疑問をもち、考え自主的に興味を深められるような授業の展開を模索したい。学生にはぜひ予習、復習を実施し、疑問点をもち主体的に授業に参加してもらいたいと考える。また歯科・口腔疾患の予防、感染予防などは実生活、生活習慣とも関連しており、学んだことは身近な情報と関連づけて実践することにより理解を深めてもらいたい。

学科：社会福祉学科 職名：教授 氏名：佐々木 隆志

対象科目：老人福祉論(社1・講義)、高齢者の生活の理解Ⅰ(介1・講義)、高齢者の生活の理解Ⅱ(介1・講義)、社会福祉論(歯科・講義)、(児童福祉論(介2・講義)、
保育実践演習・卒業研究(社2・演習)、社会福祉演習(社1・演習)、
ソーシャルワーク実習指導(社1、社2・学内指導)、ソーシャルワーク実習(社2・実習)、

1、授業評価アンケートの結果より

2016 年度授業評価アンケートの結果より、歯科衛生学科「社会福祉」の科目では、学科平均が 4.63 であり、担当科目平均点は 4.50 となっている。また、社会福祉専攻「老人福祉論」では、学科平均が 4.44 であり、担当科目平均点は 4.19 となり、介護福祉専攻「高齢者の生活の理解Ⅰ」では、学科平均が 4.43 であり、担当科目平均点は 4.41 であった。これらの結果から、3 科目とも学科専攻の平均点を下回っていることがわかる。その要因の分析が必要と考えられる。評価項目は、大別してⅠ～Ⅴの 5 項目で、「Ⅰ、授業のあり方」項目の、「授業の目的、目標が明示されていた」の設問に対する評価は、歯科「社会福祉」4.53、社会福祉専攻「老人福祉論」4.46、介護福祉専攻「高齢者の生活の理解」4.46 となり、歯科の平均 4.63 を除いては、学科の平均を上回っている。各項目のなかで、低かったのは、「Ⅲ、総合評価」の、「この授業の内容は良く理解できた」では、歯科「社会福祉」4.21、社会福祉専攻「老人福祉論」4.08、介護福祉専攻「高齢者の生活の理解」4.21 となっている。上記の結果をふまえて、次年度授業の実施方法の見直しについては、総合評価項目「この授業の内容が良く理解できた」等及び「教員は学生の理解が深まるように授業を工夫していた」等の項目の講義の内容・改善が必要に思われる。

2、授業の改善について

全体的な評価で、授業の教え方の部分で、「教員の授業に対する熱意が感じられた」では、歯科「社会福祉」4.53、社会福祉専攻「老人福祉論」4.63、介護福祉専攻「高齢者の生活の理解」4.51 と全体的に高くなっている。このことから、講義に対する熱意等に加えて、学生の理解度に合わせた講義展開がそれぞれの科目で必要であることがこのアンケートから再確認できた。前述の評価への対応では、従来の講義・補足(プリント)資料に加えて、今後、振り返りシートの実施、小テストの実施及び講義 6 回目程度で、学生の講義に対するニーズと担当科目の実施方法が合っているかの確認が必要と考えられる。介護福祉専攻の高齢者の生活の理解では、介護福祉士国家試験の「社会の理解」の重要な科目である。それゆえ、国で示されたシラバスの内容に準拠しつつ、国民福祉の動向にある最新の情報を、よりわかりやすく説明し、今後もさらに丁寧に講義を実施していく予定である。学生の講義理解の一つの方法として、「高齢者の生活の理解」の科目テキストを、将来的には国試を視野に入れ変更する予定である。今回の学生の授業評価アンケートを真摯に受け止め、更に質の高い講義をさらに進めたい。そのためには、私自身がさらに学ぶ姿勢・教育・研究に対する情熱と努力が欠かせないと考えている。学生が高い希望を持ち、社会福祉に対する専門性を求めて入学してきており、それに応える講義をさらに目指していきたい。

常に、最新の情報を、学生の視点からわかりやすく、毎回の授業の振り返りを大切に、講義を学生と共に創造していきたい。

学科:社会福祉学科 職名:教授 氏名:三田英二

対象科目:

・保育の心理学Ⅱ(演習)、臨床心理学(講義)、心のしくみ(講義、分担担当)

I 授業の目標・工夫など

当該年度から、こども学科が設置され、これに伴い、従来分担担当していた「保育の心理学Ⅰ」と「保育の心理学Ⅱ」をそれぞれ単独で担当することとなり、「保育の心理学Ⅱ」を担当した。

社会福祉専攻、こども学科で開講される「保育の心理学Ⅱ」は、演習科目であるが、講義期間前半は講義を行った。これは、保育士養成カリキュラムで指定されている内容があるため、受講生が演習を行いやすいように、この内容に関連した内容を講義した。

介護福祉専攻で開講される「心のしくみ」では、相談援助に活用できるような内容も含めるように講義を行った。これは、以前2年次に開講されていた「相談援助の理論と方法」がカリキュラム改訂により、廃止されたため、介護福祉専攻で担当する科目が「心のしくみ」だけになったためである。

これまで社会福祉専攻では、1年次にパーソナリティ発達の理解が深められるような講義内容に心がけ、2年次の「臨床心理学」で、相談援助を多角的に考えられるような授業展開をしていたが、当該年度からは、上述のようなことから、「臨床心理学」でパーソナリティ理論も多く取り上げ、相談援助に活用できるような授業展開に若干の修正を行った。

II 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

アンケートの評価点は、標準偏差を加味して考えれば、概ね、平均的な評価であったと考えている。

例年記載していることであるが、科目の特性上、座学となってしまう「心のしくみ」、「臨床心理学」においては、。たとえ話(先行オーガナイザー)を多用し、出来る限り、多くの学生が興味を引けるように心がけたい。「保育の心理学Ⅱ」も後述するように、座学となる部分がある。同様の対応をしていきたいと考えている。

「保育の心理学Ⅱ」は、当該年度から、上述のように、単独での担当となった。演習科目であるが、演習につながるように講義期間前半は講義を行った。その後、講義期間後半でグループ発表を行い、発表内容に関してのコメントをするかたちで、重要なポイントや関連事項など説明を行った。当該年度は、単独での担当の初年度に当たるため、次年度も同様なかたちを取りたいと考えている。

学科:社会福祉学科 職名:准教授 氏名:江原勝幸
対象科目:社会福祉原論学(講義)

I 授業の目標・工夫など

授業の目的は「社会福祉の原理と理念、歴史、法・制度等の基礎構造について体系的に理解する」ととし、授業の到達目標を以下に設定した。

- 1) 社会福祉の原理、対象、歴史、援助技術、担い手、組織運営と経営、制度など社会福祉の基礎構造を支える理論・仕組み（原論）を説明することができる
- 2) 社会福祉について自分自身の生活から見つめ直し、自分の言葉で「社会福祉とは何か」を述べることができる。
- 3) 新聞記事・テレビ番組などを活用し、現代社会の福祉的諸問題の光と陰について考察することができる

これまでの授業評価において、ビデオ映像を用いた教材の活用は学生に高い評価を得ており、その時々で話題・問題となっていることを取り入れるように工夫した(H27年度は、熊本地震、第24回衆議院選挙、相模原障害者殺傷事件、電通自殺労災認定など)。また、障害当事者、障害者相談支援事業所職員、静岡市社会福祉協議会職員(ボランティア担当)をゲストスピーカーに招き、授業内容と関連付けて自立やエンパワメントなど社会福祉の基盤である価値や倫理について実践的に学ぶ機会を複数回設けた。

II 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

1 年次通年の講義科目であり、社会福祉の原理・原則、歴史、制度などの基礎構造を理解する重要な科目である。通年という利点を生かし、前期で原理・原則を中心に基盤を押さえ、後期に制度・歴史について理解を深める段階的・発展的な内容・方法を用いている。授業のあり方や教え方などは基本的に変更せず、教本を使用しない授業の3年目である。授業はレジュメと関連資料(主に新聞記事)を毎回配布し、ポイントを押さえた授業展開を進めた。視覚に訴える授業は学生が興味を持ち、理解度も高まるため、ほぼ毎回授業に関連するビデオ映像を用いた。単純なビデオ視聴では授業との関連性が低くなるため、その感想・意見等を書き込んで提出するワークシートを作成し、配布・記入後の回収をした。

全体的に昨年度より若干点数が高く、#9「誠実対応」を除き学科・専攻平均点をすべての項目で上回った。平均点が4.7を上回った項目は#7「熱意」と#14「遅刻・欠席」にとどまったものの、#1「目的・目標明示」、#3「計画的展開」、#4「課題の適切性」、#5「授業量・進度の適切性」、#8「授業の工夫」、#12「新たな学び」、#15「意欲的受講」が平均点4.6以上であった。最もポイントが低い項目は#16「教員への質問」であり、学科・専攻平均点とほぼ同様の3.76であった。

今年度の授業は、この結果を参考に授業を組み立てていくことになるが、特に#9と#16が例年低ポイントのため、ワークシートとは別に年間に数回はミニ授業評価を行い、課題にはコメントを付けて返却することで、これらの項目及び関連する項目の満足度を高めることを今年度は実施する。

学科:社会福祉学科・社会福祉専攻 職名:准教授 氏名:奥田都子

対象科目:家族支援論(講義)、家族福祉論(講義)、生活支援技術Ⅰ(演習)、

介護レクリエーションⅠ(演習)、保育表現技術Ⅰ(造形)(演習)、介護実習指導Ⅱ(演習)

I 授業の目標・工夫など

社会福祉専攻の「家族支援論」は、保育士資格取得必修科目である。受講生の大半は社会福祉士受験基礎資格も目指していることから、既習の児童家庭福祉関連の授業内容との重複をできるだけ避け、支援対象となる家族そのものに対する理解を深めることに重点をおくとともに、保育現場における具体的な家族支援の技術習得を目標とし、ロールプレイ等の演習を取り入れている。「保育表現技術Ⅰ(造形)」についても、保育士資格取得に必修の科目であり、今年度より社会福祉専攻と新設のこども学科の学生が受講対象となった。これまでは2年次の「保育実習指導」の授業内で展開していた「壁面構成の制作」を、「保育表現技術Ⅰ(造形)」の授業に組み込む形で1年次に配置換えを行い、制作の前段階に種々の技法を学んでから壁面構成に取り組める環境を整えるとともに、実習前に壁面作りを経験できるようになった。

介護福祉専攻の「家族福祉論」「生活支援技術Ⅰ」については、いずれも家族の福祉ニーズに目を向け、生活の諸問題を解決していくための知識や技術、考え方を身につけ、問題解決能力を養うことをねらいとしており、自分自身の生活上の問題に目を向けることから始め、最終的には、援助者として福祉サービス利用者とその家族の生活を支援するための生活支援能力を養うことを目標としている。「介護レクリエーションⅠ」は、福祉現場におけるレクリエーション提供に向けて、生活文化を活用したレクリエーションの理論と実践について演習を通して学ぶことをねらいとしている。

また、「介護実習指導Ⅱ」は、介護福祉専攻2年次における2回の実習の事前事後指導科目であり、全体の授業運営を奥田、天野が担当し、専攻の全教員が分担して、実習課題の作成、実習記録、報告会発表、実習報告書作成について、期日を守り適切に行なわれるよう指導・助言を行っている。全体指導では、現場職員や卒業生から現場での実体験を聞く機会を設け、できるだけ、実習現場や就職先で役立つ情報を提供できるように工夫をはかっている。

II アンケート結果に対する自己評価と今後の改善・工夫

「家族支援論」は講義科目であるが、前年の授業で学生の反応の良かったディベートを今年も1回取り入れ、後半では保育現場での具体的な家族援助場面を想定したロールプレイを行った。そのねらいは保育士と保護者の両方の立場と意思について考え、演じることを通して援助のありかたについて体験的に学ばせることにある。集計結果についてみると、平均点ではおおむね好評価ではあるが、自由記述がほとんどなかったため、最終レポートでの学生の記述を抜粋すると、「事例を考えるだけでなく、ロールプレイを演じることで、どのようなことに配慮すべきか、伝えるべきかについて具体的にわかった」「クラスメートの演技を見て、自分では思いつかなかった対応や、このような表現もあるのかと勉強になった」「保護者役を演じてみて、保育士のちょっとした言動や説明不足

に、傷ついたり嫌な思いをすることを実感した」などの回答にみるように概ね良好であり、この方式による授業運営は、講義を通して学び、考え、行動することに貢献していると思われるので、今後も継続・拡充していきたい。「保育表現技術Ⅰ（造形）」では自由記述を見ると、共同制作を通して協力することの楽しさを実感した学生が多く、作品への肯定的評価のことがから自己肯定感を高めたり、評価の視点を学んだものも多かったことがうかがわれる。

また、「家族福祉論」「生活支援技術Ⅰ」では、生活上の問題に気づかせ、その解決・改善に向けての行動や社会資源の活用についての検討を通して援助のプロセスを学んでいくが、介護技術に比べると「この知識・技術を習得した」「できなかったことができるようになった」という明確な実感や達成感は生じにくい。そこで、授業では福祉サービス利用者が生活場面で問題に直面する事例を設定して、学んだ知識や技術をどの様に用いれば生活支援に役立つのかを体得することができるようにワークシートを用いたり、ロールプレイを通して実践的に考える機会を設けている。また、生活支援技術Ⅰでは、身近な高齢者・年長者へのインタビューを課し、そのライフヒストリーを作成するという課題に取り組ませることも例年行っている。

アンケートの回答からは、生活支援技術Ⅰのライフヒストリー作成についてのコメントが多数見られ、規定の文字数の多さが学生にかなりの負荷を与えていることが読み取れるが、同時に、コピペのできない 4000 字以上のレポートを完成させたことによる大きな達成感も多く語られている。家族福祉論で用いているロールプレイについても、自由記述に肯定評価が多く見られることから、大多数の学生にとってはこの方法が効果的であったと判断できる。とはいえ、グループワークはメンバー構成によっては話し合いや作業が進まずに遊んでしまう危惧もあり、すべてのグループが時間内に課題を達成できるとは限らないため、グループのメンバー構成を見ながら教員が随時声をかけ、助言を与えるなどの工夫を行ないたい。

「介護レクリエーションⅠ」については、座学による理論編と、グループワークによる実践編を組み合わせた授業展開を工夫したが、アンケート結果から、グループワークにおける制作や実践の満足感や意欲がたいへん高かったことがわかり、自由記述では多くの予想を超える好反応が得られた。この結果から、座学での理論編については、実践と連動させることによってわかりやすく伝える工夫をしていくとともに、グループワークでの意欲を維持できるように、時間配分などに細かい配慮を加えていきたいと考える。また、改善して欲しいこととして、時間の少なさやあわただしい進行、制作以外のレクリエーションも取り入れて欲しいなどの指摘が散見された。8 回という限られた時間の制約の中で圧縮した授業展開のため、このような不満が出てしまうことは無理もないが、身体を動かす系統のレクリエーション内容が、現行のカリキュラムの中にあることに起因しているため、専攻のカリキュラム構成の課題として考えたい。

「介護実習指導Ⅱ」については、自由記述の改善して欲しいことの中に、実習課題や報告書の作成過程で教員が行う添削について、学生の表現したかった内容とは異なる受け止め方をした担当教員が、良かれと思って修正したことに対して、学生は「自分の文章ではなくなった」と不満を抱くケースが見られた。この点に関しては、学生との丁寧なやり取りを心がけ、齟齬がないかを確かめていくようにしたい。

全体の総括として、グループワークやロールプレイなど学生が自ら展開していく力を活用した授業形式は、舵取りの難しさもあるが、学生の学ぶ意欲を喚起し、授業への関心を高めることには大いに効果があったと感じる。また、自由記述では、(作品や発表への)適切なコメントや、リアクションペーパーへのコメントなど、学生が授業を通してのキャッチボールを期待していることがわかった。なかなか人前での質問ができない学生たちであるが、リアクションペーパーを通しての質問は、こちらが答えるほどに活発になっていくことが実感できた。

今後も、学生とのキャッチボールを心がけ、意欲を引き出す工夫を続けていくとともに、ディスカッションのまとめ方やプレゼンテーションの方法に工夫を盛り込みながら、学生が自分から積極的に取り組めるような授業方式を探っていきたい。

学科・専攻:社会福祉学科・社会福祉専攻 職名:准教授 氏名:中澤秀一

対象科目:社会保障論(講義)、社会保障論(講義)、公的扶助論(講義)、公的扶助(講義)、社会福祉演習(演習)

I 授業の目標・工夫など

講義科目については、これまでと同様に学生が受動的にならないように、できるだけ発言の機会を設け、アウトプットできる環境を整えた。

昨年度からは全面的にパワーポイントの授業を実施し、視覚にも訴えながら理解度が高まるよう今年度も引き続き工夫を加えていった。図や絵を織り交ぜながら、できるだけイメージしやすくようにした結果か、授業アンケートの自由記述欄には「パワーポイントをつくってくれて、分かりやすかった」という意見がみられた。さらに、ビデオ教材も、アップデートな内容のものを採り入れるようにして、学生がいま社会で問題になっていることに触れられるようにした。このような工夫は今後も続けていきたい。

演習科目については、フィールドワークを中心に構成し、様々なシンポジウムに出席して学びを深めたほか、子ども食堂のボランティアとして参加したり、ドヤ街などの貧困の現場に実際に足を運んだりして、座学では学ぶことが難しい経験を積むことが良かったのではないかと考える。

II 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

授業評価アンケートの結果をみると、まず「授業はシラバスどおり、計画的に展開されていた」については、社会保障論(社会福祉専攻1年)で4.80(4.43)、社会保障論(介護福祉専攻2年)で4.64(4.43)、公的扶助論で4.76(4.44)、公的扶助で4.64(4.40)等であった(括弧内の数字は学科・専攻の「I 授業のあり方」の平均点)。いずれも高評価であり、事前に組み立てた構成が良かったのではないかと考える。今後も授業準備を怠らないようにしたい。

つぎに教え方については、「学生の理解が深まるように授業を工夫していた(説明の仕方、授業形態、板書、配布資料、視聴覚機器など)」については、社会保障論(社会福祉専攻1年)で4.95(4.46)、社会保障論(介護福祉専攻2年)で4.69(4.42)、公的扶助論で4.67(4.51)、公的扶助で4.62(4.35)等であった(括弧内の数字は学科・専攻の「II 教え方」の平均点)。これもいずれも学科・専攻平均を上回っており、先述した工夫がうまく行っていることをうかがわせる。

自由記述欄には、「歴史の背景がとても分かりやすく解説されていて勉強しやすかった」「プリントが分かりやすく記載してあったため覚えやすく見やすかった」などの記述がみられた。引き続き、分かりやすくする工夫を模索していきたい。

学科名：社会福祉学科 職名：准教授 氏名：松平千佳

対象科目 ソーシャルワーク論Ⅱ ソーシャルワーク論Ⅲ ソーシャルワーク演習Ⅰ

ソーシャルワーク演習Ⅱ ソーシャルワーク演習Ⅲ ソーシャルワーク実習指導 ソーシャルワーク実習 学科共通科目「ホスピタル・プレイⅠ(入門編)」「ホスピタル・プレイⅡ(障害児編) ホスピタル・プレイ・スペシャリスト養成講座

I. 授業の目標・工夫など

今年度から1学年が20名の定員となり、少人数であるがゆえのメリットはあるものの、ディスカッションやグループ活動において、学生同士の様々な交流を図ることが難しいという課題を感じている。特に、ソーシャルワーク演習は社会福祉士養成の中心科目であり、学生の成長を一番感じ取れる科目でもある。この科目の学びが十分に深められる工夫がさらに必要であると感じている。

ソーシャルワーク論Ⅱおよびソーシャルワーク論Ⅲについても、なるべく多くの演習内容を入れ込み、クライアントの権利擁護者として援助実践ができるように授業の目標を設定している。対人援助は座学で学ぶだけでなく、実際に援助ができるようになることが重要であるため、グループワークや、調べ学習、また身近でタイムリーな題材を用いて対話形式の授業を展開し、ソーシャルワーカーとしての働きを学べるように工夫している。

学科共通科目「ホスピタル・プレイⅠ・Ⅱ」では、HPSマインドおよび、学生が会う可能性の高い障害児に対するホスピタル・プレイの学習を行っている。ホスピタル・プレイが確実に大学内に根付いていることを感じている。遊びを強力な支援ツールとして病児・障害児を支援するHPSが、実際に講義に来て、動画などを多く使い、実践的な学びを行っているところに本科目の特徴がある。また、障害児とかわる際に役立つツールなどを作ったり、必ず演習的な内容を盛り込み、体験的に医療と遊びを融合させる方法と効果を学習する工夫を行っている。

II. 授業の自己点検・自己評価

上記したすべての科目及び評価項目において、4.5以上の結果が出ている。これは継続している評価であり、満足している。特に、質問12の「この授業は、新たに考えたり学んだりすることの多い内容だった」において高い評価となっており、何かを記憶する学びではなく、人が人を援助する意味や価値を考えていくことに、意義を見出していることが感想からもうかがえる。

学生の中には、貧困や家族の問題、またきょうだいに障害があつたり、祖父母に認知症があり介護の問題に直面していたりと、福祉の課題を自ら体験しているものも多く、自己覚知を通して、対人援助者として、また、一人の学生として、自分自身を大切にする重要性に気がついていく様子が、感想からも分かる。

III. 授業改善の展望

つまづきを自ら経験している学生の割合が、今年度から増えていると感じている。その

ため、扱うテーマも進め方にも配慮が必要であるが、一方で、彼らを対人援助者としてたくましく、社会人にしていく必要性もある。社会福祉の実習、そして演習そして個別のかわりを通して、社会福祉を包括的に学び、そして実践できるようにさらに工夫したい。

社会福祉学科介護福祉専攻 教授 高木剛

介護福祉論Ⅰ（講義）、介護福祉論Ⅱ（講義）、認知症の理解Ⅱ（講義）、介護過程A（講義）、発展介護過程（講義）

I. 授業の目標・工夫など

1) 介護福祉論Ⅰ・Ⅱ

介護福祉士制度の概要、生活の概念、利用者の尊厳保持、介護実践の原則などについて理解するとともに、これらを他者に説明できることを目標とした。授業では、難解な専門用語の使用はできる限り避けるとともに、関連資料の配布のほか、視聴覚教材（DVD等）の活用、最近の新聞記事の紹介をする等の工夫をした。

2) 認知症の理解Ⅱ

認知症の種類やその代表的な症状、中核症状と行動・心理症状（BPSD）、認知症の人のケアの基本的原則等について理解するとともに、これらを他者に説明できることを目標とした。授業では、難解な専門用語の使用はできる限り避けるとともに、関連資料の配布のほか、視聴覚教材（DVD等）の活用、最近の新聞記事の紹介等の工夫をした。

3) 介護過程A

介護過程の目的・意義、展開プロセス、チームアプローチ等について理解するとともに、これらを他者に説明できることを目標とした。授業では、難解な専門用語の使用はできる限り避けるとともに、関連資料の配布のほか、身の回りの出来事を題材とした事例問題の作成、過去の国家試験問題等の解説等の工夫をした。

4) 発展介護過程

介護実習における介護過程の実践的展開を目指し、これまでに修得した知識・技能を活用すること、また、チームの一員として介護過程の展開に係る意見交換等を行えること等を目標とした。授業では、学生の力量を高めるため、複数の教員ごとに小グループを編成し、グループ内で発表したり意見交換等ができるよう工夫した。

II. 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

1) 介護福祉論Ⅰ・Ⅱ

「授業のあり方」「教え方」「総合評価」の評価項目の平均点は、4.32～4.57であり、全体的に学科の平均点を上回っていた。授業の工夫等により、学生から高い評価を得ることができたと考える。今後も引き続き、学生の理解を促す工夫を考え・実行していきたい。

2) 認知症の理解Ⅱ

「授業のあり方」「教え方」「総合評価」の評価項目の平均点は、4.29～4.46であり、いずれも学科の平均点を上回っていた。また、学生のコメントとして、「レジュメがあってわかりやすい」「DVDがあってわかりやすい」が記載されており、学生の満足感を得ることができ

たと考える。今後も引き続き、学生の理解を促す工夫を考え・実行していきたい。

3) 介護過程A

「授業のあり方」「教え方」「総合評価」の評価項目の平均点は、4.30～4.44であり、全体的に学科の平均点を上回っていた。また、学生のコメントとして、「いつもわかりやすく説明していただきありがとうございます」が記載されており、学生の満足感を得ることができたと考える。今後も引き続き、学生の理解を促す工夫を考え・実行していきたい。

4) 発展介護過程

「授業のあり方」「教え方」「総合評価」の評価項目の平均点は、4.05～4.07であり、全体的に学科の平均点を下回っていた。特に「教え方」では、「学生の理解度に配慮して授業を進めていた」が4.0を下回っていたため、今後は授業を展開するにあたり、個々の学生の理解度を把握する必要があると考える。また、学生のコメントとして、「レジュメがわかりやすい」「グループで（介護過程の記録用紙を）見せ合うのが良かった」が見られたが、一方で、「記入マニュアルに主観・客観が記載されていない」「（介護過程の記録について）総評のみならず、個別評価も示してほしい」があった。上記コメントのうち、主観・客観については、授業で繰り返し説明しているため、（当該学生は）それを聞いていなかったと思われるが、介護過程の記録の個別評価については、学生の学びを深めるためにも前向きに検討したい。

学科・専攻:社会福祉学科・介護福祉専攻 職名:教授 氏名:立花明彦

対象科目:障害者福祉論(講義)、障害者の生活の理解Ⅰ(講義)、障害者の生活の理解Ⅱ(講義)、障害とコミュニケーション技法(演習)、リハビリテーション(講義)

各科目の評価結果は、それぞれの項目ともに例年とはほぼ類似し、いずれも学科平均値を上回った。ここでは、特に通年科目である「障害者福祉論」の結果について述べる。

社会福祉専攻の学生に開講しているこの科目は、社会福祉士の資格を目指す学生には必修であるが、保育士を目指す者には選択科目となっている。28年度は、こども学科の新設により、社会福祉専攻の定員が変更となって初めての年で、どのくらいの履修者になるか注目されたが、一人を除く23名が履修した。アンケート結果は次のとおりである。カッコ内は学科平均。

- ①「授業のあり方」4.77(4.43) ②「教え方」4.79(4.46)
③「総合評価」4.61(4.44) ④「あなたの取り組み方」4.61(4.36)

このうち、①の項目群に含まれる「教員は学生の理解が深まるように授業を工夫していた(説明のしかた、授業形態、板書、配布資料、視聴覚機器など)では4.73(SD:0.45)、②の群にある「この授業は新たに考えたり、学んだりすることの多い内容であった」4.64(SD:0.57)、③の群の「自分はこの授業を受けてこの分野に対する興味・関心が増した」では4.68(SD:0.55)、④の群に含まれる「自分はこの授業を意欲を持って受講した」は4.68(SD:0.55)であった。

自由記述欄には、「授業の感想を読んでくれてそこから新たな発見や理解を深めることができた」「“障害”の捕らえ方が変わった」の意見が寄せられた。

授業では、障害者の実像を理解する一助として時折、テレビ番組から関連する内容があればこれを録画し用いた。また新聞には、障害者に関わる事件やニュースがしばしば掲載されるので、必要に応じて取り上げ、問題点を指摘したり、解説したりもした。そのうえで、学生から意見や感想を書いてもらい、それを翌週の授業で紹介し、教員がコメントもした。これらは従来から筆者が行なっていることで、もちろんビデオや新聞記事の内容は年によって異なるが、方法としては目新しいものではない。ただ28年度においては、国連・障害者の権利条約批准に関わる「障害者差別解消法」が4月に施行された。また7月には障害当事者や家族・関係者に大きな衝撃を与えた「相模原障害者殺傷事件」が発生した。これらは障害者福祉の視点において見逃せない事柄であり、それぞれ1コマ当て、関連するビデオを用い、問題点を指摘すると同時に、障害者の人権について改めて考える機会をもった。そのうえで、重度の心身障害をもつ児童とその親をゲストスピーカーに迎え、日々の生活やそこでの課題等を伺い、重度心身障害児への理解を得る時間とした。

例年、アンケート項目の中で④「あなたの取り組み方」は低い結果となっているが、今年度は学科平均を0.25ポイント上回った。教員の思い、狙いとして学生に伝わり、彼らを刺激できたことの現われと受け止めており、さらなる向上を図っていきたい。一方で、アンケートでの自由記述欄への記入が今年も大変少なかったことは残念であり、寂しさをも覚える。全体的な傾向であるのか、それとも筆者だけのことか気がかりである。

学科・専攻:社会福祉学科介護福祉専攻 職名:講師 氏名:木林身江子
対象科目:身体のおくみⅠ(講義)、介護過程Ⅳ(講義)、医療的ケアⅠ(講義)、
医療的ケアⅡ(講義・演習)、医療的ケアⅢ(講義・演習)、介護過程Ⅲ(講義)

Ⅰ.授業の目標・工夫

「身体のおくみⅠ」では、根拠に基づいた介護を実践する能力を養うため、身体構造・おくみが一つひとつの日常生活行動と結びついているということを理解することが目標である。授業はテキストを中心に行い、必要に応じて補足資料を追加し、ミニテストを数回実施し、各章が終了したところで章末テストに取り組む時間を設け理解の定着を図った。

「介護過程Ⅳ」は、内部障害のうち心臓、呼吸器、腎臓、膀胱・直腸機能障害に加え、今年度は肝機能障害を新たに取り上げた。各領域について「身体のおくみと働き」、「主な疾患と生活支援・介護」を説明した後、学生全員に事例をもとに介護過程を展開することを課している。この一連の流れを通して、各領域の医学的知識に基づいた介護・生活支援を立案する能力を養うことを目指している。今年度もレジュメの改善に努め、各領域の講義終了時には「感想・質問用紙」を配布し、次の授業冒頭で回答する時間を設け対応した。

「医療的ケアⅠ」は、医療的ケアの基礎知識を学習する講義科目である。前半は、特に倫理に関するテーマについて、日常的なケアの場面から起きている問題や介護福祉士として必要な視点・思考・対応、終末期の医療的処置について、映像等で事例を提示し、その後グループワークを実施して学生に考えてもらった。後半は、主に喀痰吸引の基礎の講義を行った。

「医療的ケアⅡ・Ⅲ」は、経管栄養、喀痰吸引の技術演習・技術試験の他、神経医療センター、有料老人ホームの協力を得て、医療的ケアの見学実習も取り入れた。また、これに加えて用手微振動やポジショニングなど関連する技術演習も取り入れている点に特色がある。演習は8つのグループに分かれ、各グループに担当教員をつけることできめ細かい指導を可能にしている。

「介護過程Ⅲ」は、精神、てんかん、視覚・聴覚・言語障害のある利用者の障害特性の理解と介護過程の展開を通して介護サービスを提供する能力を養うことを目標としている。

Ⅱ.授業についての自己評価と今後の改善・工夫等

「身体のおくみⅠ」は、テキストに沿った授業展開や補足資料の説明が好評価であったが、期末試験の結果は、例年より全体的に点数が低かった。今後は、学生の理解度に応じた授業の量・進度をこころがけ、感想・質問用紙を配布して、教員から積極的に学生の疑問を汲み上げるよう努め、授業への関心を高める工夫をしていきたい。

「介護過程Ⅳ」は、学生からの質問には丁寧に回答し、授業の感想を参考に授業内容・量・進度に配慮したことから、授業の質は全体に向上したと思われる。しかし、学生の理解度は個人差が大きいことから、配布資料の改善、DVDの活用等により学生の関心を引き上げ、学力に沿った授業展開を心がけたい。

「医療的ケアⅠ」は、医療系科目に苦手意識がある学生もあり、授業の内容・進度に配慮が必要である。次年度は、ミニテストやパワーポイント、DVDを活用しながら、この分野への興

味・関心を高めていきたい。また、「医療的ケアⅡ・Ⅲ」では、授業のあり方・教え方等の学生からの評価も学生は技術試験にも意欲的に取り組み、全員に「医療的ケア基本研修」の修了証を発行することができた。また、見学実習では、実際の患者(利用者)に看護師が行っている医療的ケア場面を見学することで、準備から実施手順・留意点を具体的に学ぶことができたことは、理解の深まりに非常に有効であった。今後は、エンド・オブ・ライフケアや誤嚥を防ぐポジショニングなどの視点も含め、経管栄養、喀痰吸引が必要な人の生活をイメージしたケアも含めて教育を充実させていきたい。

「介護過程 C」は、オムニバス形式であり各教員の工夫により授業のあり方、教え方は高評価を得た。しかし、自由記述には「内容がバラバラで困惑した」という感想があげられており、今後科目としてまとまりある関連領域で構成できるよう、本科目の構成を検討する必要がある。

学科・専攻:社会福祉学科介護福祉専攻 職名:准教授 氏名:鈴木俊文

対象科目:介護福祉論Ⅰ(講義)、認知症の理解Ⅰ(講義)、基礎介護技術(演習)、発展介護技術(演習)、介護過程C(演習)、発展介護過程(演習)、介護実習指導ⅠⅡ、介護実習ⅠA・B、ⅡA・B、介護福祉論(講義)、介護概論・介護技術(講義・演習) 福祉経営とリーダーシップ(講義)、社会福祉演習、保育実践演習・卒業研究

I 授業の目標・工夫した点

当該年度は、新たに介護福祉論Ⅰ、認知症の理解を担当した(共に介護福祉専攻1年科目)。介護福祉論Ⅰは、介護の歴史や制度等について教授する概論系科目である。近年介護福祉士資格や地域包括ケアシステムにかかわる新たな制度改正がなされていることから、これらの改正内容を軸に、歴史的な背景と現代の介護ニーズの変化とを関連させた授業を展開した。また、例年筆者が科目担当責任者として担当している基礎介護技術、発展介護技術は、講義と演習を組み合わせた複数教員で担当する演習科目である。これまで継続的課題となっていた介護技術の評価視点及びそれに準ずる指導方法について、当該年度は中間試験を設け、個々の試験結果を面談形式によるフィードバックを加えることで段階的な到達度評価と確認を促す個別指導体制の改善をはかった。また、「福祉経営とリーダーシップ」科目は実務家の非常勤講師と分担し「福祉経営論」と「リーダーシップ論」を学ぶものであり、これまで介護施設に特化した内容を扱ってきた。当該年度は、地域包括ケアシステムに関連する様々な制度改正を背景に、新たに「災害ボランティア」と「日常生活支援コーディネーター」の内容を設けた。この内容は県・市社会福祉協議会担当職員と協働し、実践事例を交えた授業デザインによるグループワークを組み入れて行った。尚、これらの教材開発は教育特別研究活動や受託研究、科学研究費助成研究の成果を盛り込みつつ、事例性を重視した教育デザインの検討を進めた。その他、社会福祉専攻(介護福祉論、保育実践演習)、歯科衛生学科(介護概論・介護技術、社会福祉論)等他学科の授業においては、今年度も介護技術に関心の高い受講者が多くいたために、事前に授業内容と進度についてアンケート調査を行い、介護予防事業や福祉教育の内容を加えるほか、医療・保健・福祉の協働視点である「地域福祉計画・地域福祉活動計画」に関わる静岡市の事例を活用しながら、介護福祉にかかわる地域課題を積極的に取り入れた授業を行った。

II 自己評価と今後の課題

各評価項目の全体的な評価は昨年度と類似し、概ね学科・専攻平均以上の結果を得た。自由記述ではグループワークをとおした気づきや学びに関する評価が高く表れた半面、発表を課した内容においては、「時間が足りなかった」という記述が目立った。特に、福祉経営とリーダーシップにおいては、学生の関心の偏り(高さ)が大きく、この点でグループワークの進行や内容の質にも大きく影響を与えていることが考えられる。筆者の担当科目は、いずれもグループワークを数多く盛り込み、問題提起から対話へ発展させる変容的な学習過程の促しに力点を置いている。そのため、学生個々の学習状況だけでなく、関心のある内容を事前に調査し、より質の高い授業になるよう更なる改善を加えていきたい。

学科:社会福祉学科 職名:講師 氏名:濱口晋

対象科目:コミュニケーションⅠ(講義)、コミュニケーションⅡ(講義)、介護過程C(演習)、
介護実習指導Ⅰ(演習)、介護福祉演習(演習)

I 授業の目標・工夫など

「コミュニケーションⅠⅡ」及び「介護過程C」授業の目的は以下の通りである。「コミュニケーションⅠ」で介護におけるコミュニケーションの基本を学習する。「コミュニケーションⅡ」ではコミュニケーション障害がある利用者とのコミュニケーションの技法の基本を身につける。「介護過程C」では、聴覚・言語障害のある利用者への介護過程の展開方法について説明できる。これら3科目を、コミュニケーション技術の基礎・応用・発展とそれぞれ位置づけて、段階的に授業を計画し実施した。

今年度も、特別養護老人ホーム等高齢者施設や障害者支援施設等障害者施設等で介護福祉実践する上で、役立つように、失語症等の言語障害や加齢性難聴等の聴覚障害について重点的に取り上げた。工夫した点は、授業の中に演習を多く取り入れた。多種多様なコミュニケーション障害を理解し、障害に応じたコミュニケーションの技法を実際にわかることができるよう、授業の中でDVD等の視聴覚教材を使用した。また、単に視聴するだけでなく、障害を持つ利用者の状態を各自が考え、判断し、適切なコミュニケーション技法を選択し、実施していくという演習を行った。さらに、読話で実際に言葉を読み取る練習や透明文字盤をグループで製作し、ロールプレイをした結果を発表する演習も行った。

II 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

「コミュニケーションⅠ」について

(I 授業のあり方 平均 3.98→4.19 範囲 3.98～4.31)「(2)授業はシラバスどおり、計画的に展開されていた」は、4.22 であったが、昨年度 4.02 より評価があがった。過去には、「授業時間の終了時間が遅い」という意見もあり、授業の時間配分等にはより一層気を付けていきたい。

(II 教え方 平均 3.94→4.28 範囲 4.00～4.25)(III 総合評価 平均 3.98→4.31 範囲 4.25～4.34)

「(6)教員は、学生の理解度に配慮して授業を進めていた」・「(9)教員は、学生に対して誠実に対応していた」の項目が昨年度より改善しているが、若干低かった。過去には、『解説が丁寧でした』、『とても説明がわかりやすかった』、『プリントで授業を進めることが多かったので、わかりやすかった』等の肯定的な意見もみられたが、『マイクの声が聞こえにくい』や、『板書を丁寧にしてほしい』や『字が読みにくい』という意見もあり、学生の理解の妨げとなっており、丁寧に説明していきたい。今年度も授業内容の構成や流れが学ぶ側にとって、適切なものではなかったものと受け止めている。授業を計画的に展開し、学習者の理解度に応じて、修正し、双方向の授業ができるように改善していきたい。

後期の「コミュニケーションⅡ」については、前期の「コミュニケーションⅠ」に比べ概ね評価が改善した。(I 授業のあり方 平均 4.28)(II 教え方 平均 4.17)(III 総合評価 平均 4.31)

「介護過程 C」については、4.37～4.78 と、過去の評価 4.00～4.35 に比べ、改善している。「コミュニケーションⅡ」を応用発展した演習を実施したが、授業内容も重複し、学生にねらいで意図したことが十分に教授できなかった点もあるので、授業内容を再検討していきたい。

「介護実習指導Ⅰ」については、評価全体において、4.14～4.37 であり、昨年度同様の評価であった。一昨年度(3.72～3.93)と比較すると改善。今後も維持していきたい。

「介護福祉演習」については、評価全体において、4.12～4.50 であり、昨年 3.68～4.02 に比べ評価が大幅に改善した。オムニバス形式の授業であるため、各コマを担当する教員と時間や内容等の事前の打ち合わせをしっかりと行い、終了後教員同士で振り返ることをしていきたい。平成 29 年度には、卒業時共通試験に替わる新しい学力評価試験も導入されるため、学生が自主的に継続して勉強できるような工夫を考え、実施していきたい。

すべての科目において、昨年度までに比べ、自由記述への記載はあまり見られなかった。

学科：こども学科 職名：教授 氏名：永倉みゆき

対象科目：教育原理（講義）保育・教育課程論（講義）幼児教育者論（講義）

保育内容（言葉）（演習） 保育内容（総論）（演習） 保育内容（環境）（旧課程2年生：演習）

I 授業の目標・工夫など

どの科目に於いても ①保育の理論的な理解（「保育所保育指針」「幼稚園教育要領」「幼稚園教育要領」等の理解）②理論を実践とつなげて理解できる事③理解を行動に繋げることが出来ること を目的に授業を組み立てた。

当年度から始まった「教育原理」に関しては、図書館の本を使って調べ、発表するという形式をとってみたが、学生が積極的に調べ、分かりやすくまとめることができ良い学びが出来たと思う。また、「幼児教育者論」に関しても、具体例などを使って身近な話題を取り入れるなどの工夫を試みた。「保育・教育課程論」では、保育実習指導等と並行して、記録の取り方、計画の書き方などを具体例も盛り込みながら行ってみた。「環境」（2年生）「保育内容総論」では、昨年同様、グループでの調べ学習や発表を入れ、出来る限り実物に触れることができるようにした。

II 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

演習科目「保育内容（総論）」「保育内容（言葉）」「保育内容（環境）」については、おおよそ学科の平均に近いのでよかったのではないと思う。特に（総論）の6「学生の理解に配慮して授業を進めた」、（言葉）の8「学生の理解が深まるように授業を工夫していた」のポイントが高かったのは嬉しいことであった。その一方で「やり残したプリントの続きを忘れた」「学生に対して否定的な回答が返ってくることがあった」というコメントもあり、前者については担当科目が多いため、うっかりしたのだと思うので今後注意したい。後者については余りこのようにしたつもりはなく、思い当ることがないのだが、言葉の受け止め方は様々なので十分配慮したい。16「疑問点を必要に応じて教員に質問した」という項目がどの教科も低く、引き続き質問を引き出す工夫や質問しやすい雰囲気づくりなどを心がけたい。

講義科目「教育原理」「幼児教育者論」「保育・教育課程論」は授業を作りながら進めたので心配な面もあったが、演習科目と同じく学科の平均に近いのでまずはよかった。「保育・教育課程論」が、他の科目と比較して11「よく理解できた」の割合が低く（やや思うまでを含むと8割）また、16「疑問点を質問した」の点数が低いことが心配ではあるが、「難しかったけど大事なことを学べた」と感じてくれた学生もあり、今後実習指導の中でも更に具体的に教えていく必要があると思う。

教科の性質上あまり楽しく学べる内容ではないうえ、学生が、大変でも真面目に取り組んでくれるため、ついつい要求水準を上げてしまっていたのかもしれない、他の教員の授業など

も参考にして改善をしていきたい。

　　今後は、短期で結果は出なくても「わかること」と「興味を持てること」の両面を大切に、授業を構想していきたい。

学科・専攻:こども 職名:教授 氏名:朴淳香

対象科目:「保育表現技術Ⅰ(身体)」(演習)、「保育表現技術Ⅱ(身体)」(演習)、「保育内容(健康)」(演習)(社福2年)、「保育内容(健康)」(演習)(こども1年)

1. 授業の工夫

「保育表現技術Ⅰ(身体)」(演習):幼稚園・保育所・こども園で行われる子どもの運動遊びと身体表現について、学生が実技と演習を通して実践的に学べるよう、学習環境を整えた。保育の現場で実際に活用されている運動用具や教材を使いながら活動の内容を説明し、学生は実践的な活動を行いながら、内容理解を深めながら表現技術が獲得できるよう、授業を進めた。また、実践的な課題を提示し、学生同士の協働的な活動として、動きながら、また話し合いをしながら、課題へ取り組むことのできる形態で授業をすすめるような工夫を行った。

「保育表現技術Ⅱ(身体)」(演習):Ⅰよりも多様な環境を想定して、遠足の実施、児童館での地域交流実施といった実践の場を通して、表現技術の獲得につながるよう心掛けた。自らの身体表現技術を向上につなげるよう、教員による適切な言葉かけ、動きの調整を授業内で行い、毎時間、学生がふり返し記録を作成し、次の授業の自らの表現技術に生かすという形で進めた。

「保育内容(健康)」(演習)(社福2年):保育内容領域健康の基本的事項を講義したのちに、事例研究を多く取り入れ、学生自身が事例を読み解きながら、実際の保育の流れの理解や子ども理解につながるように授業を進めた。また、社会福祉学科2年生は保育実習体験がすでにあつたので、保育内容健康からテーマを設定して実習体験をふり返し、考察するという課題を通して内容理解が進むよう、取り組んだ。

「保育内容(健康)」(演習)(こども1年):保育内容領域健康の基本的事項を講義したのちに、事例研究を多く取り入れ、学生自身が事例を読み解きながら、実際の保育の流れの理解や子ども理解につながるように授業を進めた。上記の社会福祉学科2年生と異なり、未実習であるということを踏まえて、領域健康の基本的事項の説明を行い、事例研究では保育の流れや子どもの動きや心情についての具体的状況理解が深まるよう心掛けた。

2. 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

実技を主とする「保育表現技術Ⅰ(身体)」「保育表現技術Ⅱ(身体)」では、実際的な事項が多くあり、学生も意欲的に協力的に授業に参加してくれていた。学生のコメントにも、授業で行った活動が楽しく理解できたといったものが複数あり、実践を通して表現技術を獲得してほしいという意図はおおむね通じていたように捉えられた。子どもの発達段階という視点と保育者の表現技術との兼ね合いを伝えるという部分においては十分ではなかったので、15回という限られた授業回数の中ではあるが、この部分を来年度以降の改善点としたいと考える。

演習科目「保育内容(健康)」は、事例研究を多く取り入れることが、保育内容の具体的な展開を学べて学生の内容理解につながると考えて授業を進めたが、学生評価では教員への質問の機会等が少なかったとの結果だったので、もう少し双方向に進めていくよう改善していきたい。

学科：こども学科 職名：准教授 氏名：副島里美
対象科目：教育の方法と技術（講義）・保育内容（人間関係：演習）
保育内容（環境：演習）

【授業についての自己評価と今後の改善 ・工夫】

授業の工夫・授業の現状

どの授業も視覚的に理解しやすいように、パワーポイントで教科書の内容をわかりやすくまとめ、学生にはそれを見るだけではなく、重要な箇所を記入するような、学生用のプリントを配布した。授業では、次回の講義場所を伝え、事前学習で読んでくるように伝えているが、その学習が成立しておらず、事前の知識がないために、戸惑いを感じ、授業を把握しきれなかった学生がいたと思われる。

演習に関しては、相当と思われる課題を出し、それをシェアすることで意見の多様性を見出すことを目標にしたが、“自分でやること”が精一杯になることがあった。また、グループでの課題を出したときは、課題をこなす量に学生間の格差が生じてしまい、不満を持つ学生がいた。

今後に向けての改善

- ・なるべく教科書に沿って話を進め、教科書のどこに書かれてあることについて説明しているのかを、明確になるように進行する。
- ・なぜ今この内容をやらねばならないか、という理由を明確に示していくことで、将来につながる感覚が持てるようにする。
- ・もう少しゆっくりと授業を進めるように配慮していく。
- ・学生のプリントの書き込みの量を減らし、学生が“聴くこと”に集中できるように配慮する。
- ・学生に出す課題の量を再考し、厳選していく。

学生に期待すること

本授業で行っている内容は、どれも実際の現場で行われていることである。しかし、実際に現場に入ってしまうと日々の業務に忙殺され自分を省みたり、保育の意義について考える時間は限られてくる。また、“他者の意見”は“その場”でしかきくことができない（すばやい対応が必要）。そして、人には色々な意見がある。皆さん方が社会人（職業人）として成長していくため、大切な授業です。学生自身が多くの知識を“主体的”に臨んでいただくような態度で、受講してほしいと願います。

学科・専攻:こども学科 職名:准教授 氏名:藤田雅也

対象科目:「保育表現技術Ⅰ(造形)」「保育表現技術Ⅱ(造形)」「保育内容(表現)」「介護レクリエーションⅢ」(演習)

Ⅰ. 授業の目標・工夫

それぞれの授業の目標は以下の通りである。いずれの授業においても実践と理論の往還を通して、子供の成長や発達についての理解を深め、適切な指導と援助ができる、感性豊かな人材の育成を目指している。

○「保育表現技術Ⅰ(造形)」

子どもの造形活動を、日々の生活や遊びとのつながりの中で総合的に捉え、その活動を生み出す環境づくりや援助の在り方について、発達過程と照らし合わせながら理解を深める。

○「保育表現技術Ⅱ(造形)」

様々な素材や用具を活用した表現技法を体験的に学ぶ演習を通して子どもの造形活動を追体験し、指導を行う上での基礎となる造形能力を高める。

○「保育内容(表現)」

保育の内容としての5領域を関連させ、総合的に保育を展開するための表現領域の知識、技術、判断力、指導力を修得し、子ども理解に基づいた保育としての表現について学ぶ。

○「介護レクリエーションⅢ」

造形表現活動(描くこと・つくること・みること)を活かした介護レクリエーションを実践するための知識と技能を習得する。また、要介護者の立場に立った文化的な支援を行うことのできる力を養う。

Ⅱ. 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

○「保育表現技術Ⅰ(造形)」

全ての項目において、当該科目平均点が学科平均点を上回った。「授業に対する熱意」、「学生に対する誠実な対応」の2項目については、当該科目平均点が5.0であった。授業では、子どもの造形活動を育むための環境づくりや援助について体験的に学ぶ時間を大切にしたい。自由記述には、「実践だけでなく、パワーポイントを使って子どもたちが実践している様子も見れて分かりやすかった」「グループによる活動も多かったのでお互いの意見を聞きながらつくることができた」などが挙げられた。

○「保育表現技術Ⅱ(造形)」

全ての項目において、当該科目平均点が学科平均点を上回った。「学生の理解度への配慮」、「授業に対する熱意」、「学生の理解が深まるための工夫」の3項目については、当該科目平均点が5.0であった。授業では、保育現場における実践事例を踏まえながら、様々な素材や用具を活用した表現活動について理論と実践を往還させた展開を心掛けた。自由記述には、「いつも学生の質問にきちんと答えてくれて、一人ひとりの学生に目を配って声をかけてくれた」、「保育者としての援助の仕方や言葉かけについて学ぶことができた」などが挙げられた。

○「保育内容(表現)」

全ての項目において、当該科目平均点が学科平均点を上回った。授業では、5 領域を総合的に学ぶオペレッタの制作と公演や、保育所及び幼稚園実習を想定した指導計画立案と模擬保育などを主な学習活動とした。自由記述には、「実践力を身につけられる内容で学ぶことが多かった」、「実践的なアドバイスをもらえて、とても勉強になった」などが挙げられた。ただし、オペレッタの公演時期については、もう少し後にしてほしいという意見も挙げられており、今後検討していきたい。

○「介護レクリエーションⅢ」

ほぼ全ての項目において、当該科目平均点が5.0であった。受講学生の学習意欲が高かったことも影響していると思われる。授業では、できるだけ身近にある素材を取り上げ、素材の特性などについて実践を通して学ぶ時間を大切にした。自由記述には、「たくさんの経験や知識を身につけることができた」、「幅広いレクリエーションを楽しく学ぶことができて良かった」などが挙げられた。

学科・専攻:こども学科 職名:講師 氏名:山本学

対象科目:保育表現技術Ⅰ、Ⅱ(音楽)(演習)、音楽、音楽通論(講義)、保育内容(表現)

授業評価アンケートの集計結果、自由記述に対するコメント

○保育表現技術Ⅰ(音楽)(山本学、カタヴァ美樹、田代千早、原川葉子、原田大雪、丸尾真紀子、八木名菜子、山田美穂子、鷺巣貴乃)

○保育表現技術Ⅰ、Ⅱ(音楽)(山本学、田代千早、原川葉子、原田大雪、丸尾真紀子、八木名菜子、山田美穂子、鷺巣貴乃)

本授業は、Ⅰではピアノ奏法の基礎と子どもの歌の歌唱を45分間ずつ、Ⅱでは応用ピアノ伴奏法、特に子ども対象の想定で実践的な内容を学習し、声楽、ギター、管打楽器、音楽療法を残りの45分で選択履修する。授業はレパートリーカードを採用し、独自の工夫を行っている。

集計結果は昨年度と比べ、ほぼ同じアンケートの数値となった。また、Ⅲ総合評価学科においては学科の平均点を大きく上回った。学生の満足度を得られた要因として3つ考えられる。一つ目は、各担当講師が、それぞれの音楽の専門分野を生かすことができる方式であり、学生にとって大きな学びであったこと、二つ目は、課題の量を担当者としては少なめに設定することで、学生にとってはちょうど満足に消化できる量であったこと、三つ目は、ピアノも選択音楽も学生が自分で学んでいるアクティブラーニングのような方式が本学の学生に合っていたことである。

○音楽通論(単独)

本授業は、音楽史、楽典、曲の知識などを複合的、有機的に講義している。

昨年のリアクションペーパーや学生の反応から、難しすぎるとされた箇所はより平易に改善した。また、結果的に学生の興味を惹かず、学生の身にならなかったと判断した回の講義は新たにスクラップ&ビルドを行った。総合では学科平均を0.3ポイント上回った。

○音楽(単独)

本授業は、幼稚園教諭免許状取得の必修科目である。音楽の楽典的知識、小学校音楽科との関連等を学習する。学科平均を0.4ポイント上回ったが、自由記述でグループワークが難しかったとあり方法の改善の余地がある。

○保育内容(表現)(藤田雅也、山本学)

学科の平均点とほぼ同様であった。試験の方法を公開でやっていることに対する不平等があるが、保育者として他人の前で実技を行うことは必ず役に立つことだと考え、今後も変える予定はない。ホワイトボードの字が薄く見えづらいというのは、物品の性質上仕方ない面もあるので、板書を減らし、できるだけプリント等を使用することで改善していきたい。また、質問する機会が少ないのか点数が低めなので改善していきたい。

学科名： 社会福祉学科 職名： 非常勤講師 氏名： 飯塚哲男
対象科目： ソーシャルワーク演習 1・2・3

I、①授業の目標・②工夫など

1-①『 授業の目標 』

ソーシャルワーク専門職（保育士、社会福祉士等）を目指し、聴く力・説明する力・質問する力・チームでの協働性を踏まえた相談援助が身につくように目標とした。

ソーシャルワーク過程、インテーク・アセスメント等における学生の言語・非言語コミュニケーションのマインド・スキル・テクニックを学び、気づきを多く得てほしい。

ソーシャルワーカーとして自己覚知を踏まえた価値・倫理・理論・モデルの基礎を演習で学び、他者に対する共感的理解が実践できるように社会福祉実習と関連を図り相乗効果で学び・気づきを深めてほしい。

1-②『 授業の工夫 』

授業毎に演習ポイントを具体的な授業目的、目標の明示を意識した。

ソーシャルワーカーに必要な価値・倫理・アプローチ理論の基礎講義、演習にて高齢者、障害者、児童等の事例を用いた。教材（レジュメ、DVD、振り返り用紙など）の活用、グループワークでグループダイナミクス効果を図った。学生同士や学生と講師でディスカッション設定を図った。学生に授業の終わりに振り返り用紙を記入してもらい講師が学生ひとりひとりに毎回コメントを記入した。

評価アンケートでは、生徒から『教員は、学生に対して質問への対応、レポートへのコメント等。』部分が4.9以上の高い結果だった。但し、学生の立場を踏まえると、なかなか全体場で質問することは、抵抗感があると思われた。今後も、疑問点が発言できるように、学生がイメージしやすい事例、ロールプレイを積極的に継続していきたい。

II、授業についての自己評価と今後の改善点・工夫

学生の演習への参加姿勢・態度が真剣で意欲をもって参加してくれた。

当科目平均点は、4.77 以上だった。『Ⅰ授業のあり方』・『Ⅱ教え方』・『Ⅲ総合評価』項目で主として『授業目的、目標の明示』・『授業の計画的な展開』・『授業の難易度』・『教員の授業に対する熱意』・『教員は学生の理解が深まるように授業を工夫していた』・『この授業は、新たに考えたり学んだりすることの多い内容だった』・『教員は、学生に対して誠実に対応していた。』において4.6以上で評価を受けることができた。

アンケート自由記載欄、振り返り用紙では、「レポートのコメントが毎回楽しみでした。1人1人、絶対ちがうコメントだろうなと思いました。個別化ってうれしいです。」等のコメントをいただいた。『個別化』の大切さの理解を体感していただき嬉しいです。

改善点は、『Ⅳあなたの取り組み方』の『疑問点を必要に応じて教員に質問した』の欄で昨年より1ポイント上昇したが評価点が4.2前後と十分に意欲を行き出すに至っ

ていない。これは、スーパービジョンにおける教育的機能がまだ不十分と分析しています。

学生の振り返り用紙を有効的に活用し、学習効果が高まるよう学生の意見やモチベーションを尊重し、学生の自主性向上に努めていきます。ソーシャルワーク演習ⅠⅡⅢは、通年2年、数名の教員で取り組んでいます。教員同士の連携を深め、学生へのモチベーションが高まるように努めます。

以上。

授業評価アンケート

非常勤講師 岡村由紀子

対象科目： 障害児保育 乳児保育 幼児理解

3クラスで授業をさせていただきましたが、どの学生も熱心に意欲的に取り組む姿が多く有り、そんな気持ちに応えるように「解りやすく深い学び」になる様、具体的事例を出し授業を展開してきました。

総合評価の中の授業理解の3項目が高くあることからねらいが一定に達せられていることが分かりホッとしています。

特にこれらの授業を通じ「保育」に興味を持っていただけたことは、これからの保育界にとっても大きいことで期待しています。

学生の取り組みの中の15、16、17にかかわり授業が一方的にならないよう、自ら自己学習が高むような工夫をしていきたいと思っています。

非常勤講師 川瀬俊夫

対象科目：歯科衛生行政学

I 授業の目標・工夫など

歯科衛生行政学は「歯科衛生行政の目的や組織、法制度などの基礎的知識を修得し、歯科衛生士として業務を適正に実施するために必要な法規について理解する」を目標としている。現在では歯科衛生士は保健衛生活動の専門職として確立しつつある。歯科医学の発展と他（多）職種との連携が医療現場で日常の業務として、歯科衛生士の適切な対応が求められている。また、歯科衛生学の基礎知識・技能ばかりでなく、歯科衛生学は「歯科衛生士が歯科疾患の予防処置、歯科診療の補助および歯科保健指導を中心とした歯科衛生業務を専門職として実施するための理論的・実践的根拠となる学問体系である」との認識が重要である。歯科衛生士の業務を行うにあたり「歯科衛生士法」にはじまり、「健康増進法」から「歯科口腔保健の推進に関する法律」に至る多くの法令を理解することが求められている。

教科書として末高武彦著の「歯科衛生士のための衛生行政・社会福祉・社会保険」を用いているが、歯科衛生士の教科書としては他にはない単著者であることから統一性のある教科書である。そのため、授業では教科書に沿った進め方をし、教科書内の重要な点をスライドに示し、補足が必要な最新の疫学調査等の資料についてはプリントを作成している。

また、要所要所において過去の国家試験問題を演習問題として示し、理解を深めている。

II 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

教科書の項目に沿った内容でシラバスを作成し、授業を行ってみた。歯科衛生士法を含めて衛生関係法、保健医療の動向を統計調査として、授業を進めた。しかし8回でまとめるには、昨年同様に保健医療の動向に十分時間をかけることができなかった。これは大きな反省点である。また、「歯科衛生行政学」は必ずしも学生にとって興味のある科目とは思われない。学生に興味を持ってもらう工夫が必要である。そのためには、歯科衛生学と疫学調査の情報を明確に示す必要がある。したがって、今後の改善としては歯科衛生行政を教科書に沿った進め方と、歯科衛生士の業務を中心にした歯科衛生行政学の授業とし、全体としてバランスのとれた授業の進め方にすべきと考えた。

また、国家試験の過去問題には興味を示しているので、積極的に今後も充実した演習問題を組んでみる工夫を考えている。

非常勤講師 氏名：喜田賢司

対象科目：歯科矯正学

I 授業評価アンケート集計結果について

当科目平均点 4.84、学科・専攻平均点 4.63 とかなりの評価を受けたと思う。「授業の目的、目標から見て、授業の難易度は適切であった」「教員は、学生の理解が深まるように授業を工夫していた」「教員は、学生に対して誠実に対応していた」という項目の中で「どちらとも言えない」が1人。「自分は、疑問点を必要に応じて教員に質問した」では4人という結果であった。歯科矯正学は学生にとって非常に難しく感じられるようで毎年この項目には良い点が付かないようである。少しでも興味を持つように症例のスライドを出し、目で見て覚えられるようにしているのだが。また、毎授業終了時には質問がないかを問うのだが、多分、分からないことが分からないのではないかと常を感じている。科目的に拒否反応を示しているのではないかと考えている。

II 授業の工夫

前述の通り、学生には必ず質問があったら授業をストップしても良いから声を挙げて欲しいと言っている。ただ、今年の学生は思ったことをその場で発するものがいたため、以前よりも楽しく授業を行うことができた。また、臨床の立場から歯科矯正学の必要性を話、また体験談を含めなるべく寝かさないように努力をした。学生に背を向けて講義するのではなく、学生の目を見ながら講義するように勤めた。少しでも器材や矯正装置に触れることができるように実物を見せ、理解に勤めるようにした。

III 学生へ

授業中にも話をしましたが、歯科矯正学はあなた達が将来必ず必要になる科目です。近心、遠心、傾斜、捻転、叢生、上顎前突、下顎前突等々、日常臨床の中では必ず出てくる言葉です。また、患者様と向き合ったときに、小さな子供を持つお母さんはあなた達に色々な質問をします。子供の成長のこと、歯の生え方、口腔習癖など。けして難しいと考えずに取り組んでいただきたいと思います。

非常勤講師 氏名：グロッセ世津子

対象科目：介護レクリエーションⅣ

講義では、福祉施設や地域の庭など臨床の現場における活動の様子をご紹介しました。認知症の方も含めた高齢者、発達障害、精神障害あるいは身体障害をお持ちの若い方々が、日々どのように植物に触れ、どのように変化されているかを見ていただいて、植物の癒しの力、さらに、ひとりひとりの潜在能力を引き出す植物の力についても理解を深めていただくとともに、レクリエーションを展開するにあたって大切な場作り・関係作りのスキル、特にコミュニケーションスキルについても学んでもらえるように配慮しました。講義を通して、人と植物という「命」の大切さについてもあらためて気づいていただけたようでうれしく思います。

演習では、芝生坊やという形で種から植物を育て、観察し、日記をつける過程を通して、「命」に寄り添う体験、感情の動き、観察力、好奇心などを体感して欲しいと考えました。さらに、ハーブ、枝、種、実、花など生の植物に触れながらの作品作りを通して、五官がどのように刺激を受けるか、心がどのように動くか、会話がどのように弾むか、記憶や想像力など脳がどのように働くかなど、参加者側に立った体験を提供したいと考えました。と同時に、自ら楽しむ大切さも。

さらに、道ばたの草花でも工夫次第でいろいろな活動につながる、というヒントもたくさん持ち帰って欲しいと考え、講義及び演習を通して幅広い植物の活用方法をご紹介しました。最後に、宿題が多い、という指摘もありましたので、次年度は検討したいと思っております。

非常勤講師 氏名：久保幸恵

対象科目：社会調査の基礎

一昨年度までは、単に私の話を聞いて、プリントに黒板の字を書き写してもらう授業をしていたが、昨年度はアクティブラーニング方式を取り入れ、グループを作って実際に作業をしてもらいながら授業を進めるという形式を採った。この形式を採るのは初の試みであったが、学生さんからのアンケートを見ると、おおむね好評だったようである。「面白かったし、すごく興味深かったです!」、「実践できるので、よかった」、「先生とのコミュニケーションがとれて、話しやすかったし、聞きやすかったし、良かったと思います」などの評価をいただくことができた。

授業中は、私がパソコン・ルームの中を移動しつつ、作業の進行状況を確認し、各グループにアドバイスをする時間が多く、やはり私にとっても、学生さん一人一人の顔を見て話しながら授業を進められたことは楽しかった。初の試みではあったが、授業はほぼ予定通り、スムーズに進行し、学生さんたちの最終発表の出来も良かったと思う。

ただ、いくつかの課題は残った。それぞれの作業段階に応じて、事前に説明を行うよう心がけていたが、グループごとに進行状況の違いがあり、作業を自己流で先へ先へと進めてしまうグループもあった。進行が早いこと自体には問題がないが、「社会調査」において学問的に推奨される分析方法の説明をしたにも関わらず、それらの説明が後手に回ってしまったことにより、推奨される方法をあまり採用しなかったグループもあった。本年度からは、説明のタイミングを慎重に見極めることに努めたい。

また、学生さん全員がスマホやパソコンでの作業にある程度、慣れていたために、学生さんの自主的な作業に任せた部分も大きかったが、パワーポイントを使った発表の仕方であるとか、ちょっとした注意が必要な場面において指導が足りなかったと思う。また、学問的な分析方法の説明の仕方に関しても、今後は工夫を加える必要があるだろう。シンプルに手順を紹介することよりも、実際にそれらの分析方法を用いて作業することを念頭に置いた説明をする必要があると感じた。さらに作業内容の問題であるが、昨年度はアンケート調査をするグループとインタビュー調査をするグループに分けたが、作業の大変さに差がでてしまった。時間的な余裕があるように見受けられるので、本年度からは、全てのグループがアンケート調査とインタビュー調査の両方を体験してもらうことも検討している。

まとめとして、様々な問題点が発見されたものの、最初に書いたように、初の試みではあったが、学生さんからも好評であり、作業をすることによって到達した学習成果は十分に高かったと考えている。今後も、この授業方式を続けていきたい。学生さんには、授業が充実したものであると感じると同時に、楽しんでもらえれば良いと思う。

非常勤講師 氏名：佐々木光郎

対象科目：司法福祉（講義）

2016 年度後期「授業評価アンケート集計結果（司法福祉）」をもとに進める。

I 授業の目標・工夫など

(1) 授業の目標

司法福祉は社会福祉学の体系では二次的分野である。学生にはなじみにくい領域であるので、社会福祉実践と法のかかわりを身近に理解できるようにする。ところで、標記アンケート結果によると、「この分野に対する興味、関心が増した」の評価が、学科・専攻平均点を超えた。この受講ニーズを維持したい。この評価も踏まえつつ、本授業の目標をつぎの2つとする。

ア 福祉援助のとき、法的知識を身につけることが大切であることを理解する。たとえば、子ども虐待の問題では児童虐待防止法や児童福祉法等の法知識を踏まえた対応が必要である。あるいは、家族をめぐるトラブルや少年非行・いじめ等に直面しその法的解決の過程で、困っている人たちに対する援助（支援）の技術・技法を身につける。

イ 社会福祉士の国家試験（更生保護）に必要な知識等を習得する。

本科目では、上記のアは当職、イは竹内政昭講師が担当する。以下、アのみについて述べる。

(2) 授業の工夫

「授業に対する熱意」および「誠実に対応」の項目は、相当の評価があるのでこのスタンスを続けたい。また、「授業の量や進度は適切」も平均点に達するが、さらに改善・工夫に努める。

ア 課題の精選、授業内容の配列

精選とその配列にはいっそう工夫する。課題では、この分野での今日的な問題を取り上げる。たとえば、「少年法の適用は17歳までか」などである。

イ 授業の進め方、教授方法の工夫

アンケート結果では、「シラバスどおり、計画的に展開」の項目の評価は、学科の平均点を下回る。これは、「授業の話題が、あれこれと転じ過ぎる」（受講生）と、考える。については、シラバスどおりに、進めることを基本とする。ほかに、つぎの工夫を実践する。

- ① 竹内政昭講師の講義を踏まえ、当職が担当する授業のなかでも、できるだけ更生保護の内容を繰り返し、学生が再学習ができるようにする。具体的には、竹内講師が用いたテキストの復習や国家試験の「過去問題」および「予想問題」を解く時間を設ける。
- ② 適宜、補助資料を配布し、幅広い応用力（生きて働く知識）が身につくのに資する。
- ③ 授業の過程では学生が主体的に考え発表できるようにする。授業形態も工夫し、互

いに学びあう共同学習や、一部、演習方式を採る。いつでも「必要に応じて質問」できる態勢とする。

Ⅱ 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

(1) 自己評価

「Ⅲ総合評価」では学科・専攻平均点を上回っているものの、「Ⅰ授業のあり方」および学生の「Ⅳ取り組み方」では平均点に及ばない。その理由を精査し改善に取り組む。

(2) 今後の改善・工夫

ア 授業内容の充実に努める。適切な教材を選び配置する。

イ 教授方法の改善・工夫に努める。①ガイダンスの段階で、本科目の目的・目標を示し、授業内容の構成を丁寧に説明する。②学生の受講ニーズをしっかりと受け止める。③専門用語は簡潔かつ平易に分かりやすく説明する。④板書についても配慮し要を得た簡潔なものとする。

ウ 最新のデータ・資料を活用し、学生の興味・関心が高まるようにする。事例検討・演習においては具体的事実をもとに進め、その際に教員の30年余間の実務経験を生かす。

(3) 学生に期待すること

疑問点や意見を積極的に発表し、教員と共につくる授業としたい。

非常勤講師 氏名：佐々木崇暉
対象科目：日本経済論（講義）

I 授業の目標・工夫など

今回の授業では、複眼的思考を身につけてもらうことを第一の目標に置きました。経済学は社会認識の違いによって、異なった概念装置が存在します。したがって、一つの事象をみる場合も複数の概念装置で捉えることが必要です。講義の中で、重要な概念・モデル・理論を説明するとともに、それらの概念装置を絶対視するのではなく、それを通じて見えることと、逆に見えなくなることを理解することの重要性を指摘しました。具体的な事例を挙げて何度も説明しましたが、複眼的思考の大切さを十分に理解してもらえところまではいきませんでした。受講生の多くは唯一の正解だけを求める傾向にあり、戸惑いを感じたと思われます。この点について、より一層の工夫が必要であることを痛感しました。

第二に、受講生の専門分野と関連付けて、日本経済の課題を考えさせる方法を取りました。「社会保障・社会福祉で日本経済を再生できるか」というテーマで日本経済の課題を捉え、その解決策を提案しました。この点について受講生は、大いに興味を持ち沢山のコメントや質問を受講生からうけました。今後も、この点については、さらに力を注ぎたいと思います。

第三に、できるだけ双方向的な授業を運営するために、毎回「コメントシート」を配布し、感想や質問を書いてもらいました。とてもユニークな質問や感想があり、講義を進めていくうえで参考になりました。コメントシートに対するリプライは、次回の授業でプリントにして配布する方法をとりました。この方法は受講生に受け入れられたと思います。

II 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

今回の「授業評価アンケート」の結果をみると、「総合評価」において、前回よりも評価が下がったと思われます。特に「授業内容は良く理解できた」という項目については低い評価結果でした。したがって、日本経済の在り方が私たちの暮らしに、いかに直結しているかを理解させ、「興味を持つ」とともに「学力の向上」がつながるような工夫が必要であると思われます。そのためには受講生の疑問に基づいた対話形式の授業を試みようと思っています。

今後の授業の在り方については①新聞の経済記事やビデオを使って、より具体的なイメージを持てるような授業をこころがける、②受講生が専門にしている介護や社会福祉を経済問題と関連させながら理解させる、③経済データの読み解く能力を身に付けさせる、④理解度をチェックするミニテストや課題を課すこと、などによって授業改善に努める予定です。

非常勤講師 氏名：坂本健

対象科目：児童家庭福祉（講義）

I 授業の目標・工夫

児童家庭福祉分野の機関・施設の実際を理解し、教室での学びを少しでも実践と結びつけて理解できるような授業を目標としている。1年次の通年科目であるため、自己の体験等と関連付けて考察を深めることにはやや困難な側面があることは否めないが、2年次以降の実習や各自の活動に役立てていただけるよう、授業の充実に努めたいと考える。

II 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

ほぼ平均的であるため、個別の項目について、特にコメントはない。ただ今日予習復習の必要性が強く求められていることから、各回の授業の受講にあたり、調べておくべき事柄を事前に提示すべきであったと考える。また、通年科目であるのに定期試験一回では試験の準備が大変との記述があったが、その分試験についての説明はかなり丁寧に行っているため、この点については現状でも問題はないと考える。なお「社会的養護」との関連についての意見もあったが、こども学科は「社会的養護」が必修、社会福祉専攻は選択で履修している方とそうでない方が混在している形となっているため、社会的養護関連領域の扱い方については、担当者も戸惑っているところである。ただ既習であっても、児童家庭福祉において社会的養護分野は重要な位置を占めていることから、「社会的養護」を履修の方にはより深く理解ができるよう、また本授業ではじめての方にはその重要性を認識していただけるよう、授業内容の充実に努力したいと考える。

非常勤講師 氏名：鈴木美奈子
対象科目：健康社会学（講義）

I 授業の目標工夫など

人々が生活している場（家族、学校、職場、地域、病院など）での人間関係力を活用し、人々が健康で幸せな生活を営むことができるようにするための知識と技術（ヘルスプロモーション）について学ぶことを目的とした。

授業では受動的に知識・技術を学ぶだけでなく、創造力・応用力を育むことをねらいとし積極的な参加を促した。

そのため、常に学生とは一方的にならず双方向のやり取りを大切にし、学生が主体的に取り組むようきっかけをつくるなど、アクティブラーニングを心がけ、共に授業をつくることを意識している。

また、実践例や経験談などを多く取り上げ、身近なものとして捉えてもらえるよう努力をした。その中で保健医療従事者（健康づくり支援者）としての使命感や、分野間協力の視点を育むことを意識しメッセージを送る授業展開をした。

II 授業の自己評価と今後の改善・工夫

基本的に我々が学生に対して期待していたこと、自分たちが心がけてきたことが伝わっていると受け止めた。昨年度に引き続きアクティブラーニングを心がけた授業形式をとることが、学生にとっても我々にとっても良い点であったと思われる。

また、自由記述から、知識の取得のみならず、同級生の考えなども聞けることで視野が広がったり、深く考える機会を得たと感じてくれた学生がみられたのは、大変良かった点と受け止めている。

改善点としては、評価アンケートから他の項目に比べると学生が疑問点を質問する機会が少ない傾向にあった。平均得点は上回っているものの、疑問点を積極的に質問することは難しいようであった。そのため、今後は疑問点を共に引き出し、解決していけるような内容を盛り込んでいきたいと思う。

さらに、質問できる時間を設けたり、質問しにくい学生のために、講義終了後に用紙を配布して、疑問や感想等を記述してもらおうなどの方法を取り入れ、工夫していきたい。

非常勤講師 氏名：高井 由美子

対象科目：身体のおくみⅢ

授業評価アンケートについての報告書

授業の工夫

- ・ 医療に対する苦手意識が生まれないように、パワーポイントでの講義方式とし、視覚を通して印象に残るようにしてみました。
- ・ 国家試験に必ず出題される分野のポイントをふまえ講義を進行しました。
- ・ 疾患の症状や支援ポイントがわかりやすいように、DVDや動画を多く取り入れました。
- ・ 健康、命、生活を守り、支えるということについて知識という側面からばかりでなく、こころで感じて考えてもらえるように、ドキュメント等の映像も使用しました。
- ・ これからの時代は、看取りも含めた生活支援が必須となるため、学生自身の死生観を問う講義にも力を入れました。
- ・ 最終講義では、いくつかの事例をもとにグループワークでケア展開を考える講義を行いました。

授業についての自己評価

- ・ レジュメのポイントがわかるように今年も穴埋め式にしましたが、そこがポイントであることが今一つ一部の学生に伝わっていませんでした。次年度の学生には、あらかじめ説明します。
- ・ 解剖生理、各疾患の病態をわかりやすく説明していけるように努力します。
- ・ 映像を通して感じたり、考えたりする授業内容は有効であったと思います。
- ・ 自身の実践から学んだことを事例としてあげ、観察ポイントやケアへの結びつきを話すことは、学生にとってもわかりやすいということがわかりました。
- ・ 最終講義のグループワークでのケア展開は、ポイントをつかんだケアを考えることができたように思います。

今後の改善・工夫

- ・ 講義の進行スピードは確認していきたいと思います。
- ・ レジュメについては、穴うめで大切な部分がわかるように今後も書き込み式にし、前年度をふまえて更に改善していきます。
- ・ 健康面を考えた支援とはどういうことなのか、ドキュメンタリーや映像も組み込み、最終的には学生たちがそれぞれに考えることができる講義を組み立てます。

学生に期待すること

- ・ その人の暮らしの支援とは、原疾患や障がいがあっても個々に望む「あたりまえの暮らしを守る」ということです。介護福祉士という仕事において、それぞれの対象の持っている病気を悪化させないように、そして少しの体調の変化にも気づいて適切な対応や助言をしていくことは、暮らしを守るうえでとても重要なことだと思います。その重要さを理解し、少しずつ身につけていってください。

非常勤講師 氏名：千綿 一郎

対象科目：歯科補綴学（講義）

歯科臨床の場において毎日の様に対応する事が多い歯科補綴学です。
補綴が施されている口腔内では歯科衛生士業務が大きな役割を果たします。
基本をしっかり学んでいきましょう

非常勤講師 氏名：中尾健二

対象科目：現代と哲学

数値的データはおおむね良好、とくに自由記述はポジティブな意見が多かった。その原因の一つとしては、昨年度は所有している DVD に輸入盤が多かったため持ち込みパソコンで上映しようとしたものの技術的なトラブルで上映できなかったものがあり、受講生の不興を買ってお叱りをうけたが、今回は国内版をそろえてこの難点を回避できたことである。授業内容はこれまでとそれほど変えてはいないので、評価が良かったとしたら、そこらへんが理由だろう。

今回の問題点としては、昨年、一昨年と受講生は 50 名弱であったが、今年度は 70 名超となり、そのせいかどうかわからないが、ビデオ上映中以外は私語が多く往生してしまった。これまではこんなことはなかった。他大学では私が話し出すと静かになるのが普通だけれども、したがって注意する気にもならず授業を続けたが、こんなものなのだろうか。

非常勤講師 氏名：原川洋子

対象科目：介護レクリエーションⅡ

授業では、音楽を活用したレクリエーションを企画しグループワークを実施する上で、利用者が楽しく活動に参加する為の援助や工夫を学生が主体的に考えることが出来ることを目標としました。

具体的には、「①利用者の馴染みの音楽を知る。②音楽レクリエーションに適した楽器の扱いや活用を知る。③利用者が共に音楽活動を楽しめるグループ活動を企画・実施する。」です。

授業ではCD鑑賞で曲を紹介し歌唱活動も実践しましたが、活動内容（歌唱活動・楽器活動・軽体操等）により利用者の馴染みの曲だけでなく幅広い年代で楽しめる曲もとりあげ実践に役立つワークを行いました。そして楽器活動では簡易打楽器、ハンドベル、トーンチャイムなどの演奏を通して、五線譜を使用しない演奏法も紹介しました。また、グループワークの企画・実施では、ロールプレイで実施者役だけでなく、利用者役の体験から利用者の立場に立つ援助について考えるように配慮しました。

高齢者の現場で活用されている音楽（昭和の懐メロや民謡・唱歌など）は、学生には馴染みがありませんが、曲を知るだけでなく歌えるようになると活動の幅が広がります。また、高齢者の馴染みの曲だけでなく、ラテン音楽やクラシック音楽や最近流行りの曲等も活動を工夫すれば、利用者と共に楽しむことが可能です。

目的に適したレクリエーションを実施する為に、利用者に対する声掛けや参加意欲を引き出すアプローチも重要です。現場では応用力が必要となりますが、利用者の身体状況や認知レベルに合ったプログラムを考え、臨機応変にアプローチして下さい。利用者と共に楽しめる活動へ体験を通して学んだことを生かしましょう。

学科：一般教育等 職名：非常勤講師 氏名：原田茂治

対象科目：情報処理演習（演習）、情報の活用（演習）

I 授業の目的・目標など

情報処理演習：基礎的な情報リテラシーを身につけて、大学での勉学や、職業および市民生活に役立てること。

情報の活用（原田担当分）：マニュアル検索から機械検索への流れを知った上で、Internet上で成書、雑誌、新聞および論文の検索や、JDreamⅢなどのデータベースの検索を行えるようになること。

II 授業の自己点検・自己評価

「情報処理演習」

情報リテラシーの基礎（情報処理教室ネットワークの使い方、E-mail, MS Word, Excel, PowerPoint, Adobe Photoshop Elements）を学ぶだけの演習であるが、毎年これが意外と好評なのである。

学内で写真撮影をして、それをプリントラボレベルに仕上げることで、複数の写真を含む文字入りの絵はがきを制作することを、従来と同様に演習の一環として行った。写真の色調と階調を整える程度のレタッチまでを実習したせいも、昨年度のオリジナル設問による調査の結果では、授業アンケートで写真制作が一番面白かったと答えた学生が90%を超える状態であった。今年度はこの調査を行わなかったが、自由記述に「写真の作成が楽しかった」という感想があった。昨年度の調査結果であるが、一番勉強になったテーマは圧倒的にExcelであった。作表、作図はもちろんのこと、簡易データベース、関数、統計入門（標準偏差と相関係数）を取り扱ったので、高校のレベルを超えたということで勉強になったのであろう。Wordは、既習の学生にとっては繰り返しの学習となり（③つまらなかった19%）、未修学生には②一番勉強になった（17%）のであろう。PowerPointには2回しか時間が割けなかったため、あまり良い評価を得ていないようだ。図中のnonはテーマ未記入を表す。Wordに多くの時間を割くことを見直すときがきているようである。次年度からはこのオリジナル設問による調査を再び続けたいと思っている。授業評価の平均点は、学科専攻の平均並みであるので、特に評価はしない。なお、今年度の「情報の活用」はアンケートの実施対象外であった。



学科： こども学科 職名： 非常勤講師 氏名： 林正雄
対象科目：英語（演習）

アメリカ文化研究をテーマとするこの授業ではテキストの講読に留まらずに、授業内容と関連性の高い NHK や BBC の映像資料を教材化した。実際に使われている英語に接することを目的にしたものである。映像資料を見た後で、その内容を要約し、その要約の英訳を試みた。Weblio の使い方なども習得していただいた。学生から提出された期末レポートの授業感想で、年間の授業内容を的確にまとめたものがあるので、それを紹介したい。

〈前期の授業を通して、教科書だけでは学ぶことのできない多くの知識を得ることができた。オバマ大統領の演説や、弓浜絃、デンタルフロス、眠れる森の美女、ピーターラビット、など数々のものを見てきた。眠れる森の美女、ピーターラビットでは、普段日本語で聞いているものが英語であるため、内容を理解するのは少し難しかったけれど、映像とともに見ることで、字幕の英語と見合わせて、意味を考えることができた。ルート 66 の映像を実際に見ることで、教科書だけで想像していたものよりもはるかに規模が大きく、壮大であり、アメリカの地図も見ること、距離の感覚をつかむことができ、より教科書を読んでいてイメージが沸きやすくなった。文章だけでは伝わりにくいことも、映像を見ることでこんなにもイメージが広がるのだと感じた。また、多くの国の映像から、日本と全く違う感覚を味わえ、海外に興味を持つようになった。他にも様々な国を見て知っていきたい。中でも一番私の心の中に残ったのはキング牧師の話だ。何度も逮捕され、多くの批判を受けながらも黒人に対しての扱いが平等になるまで訴え続けた牧師は本当の英雄だと思う。自分だけでない世界のためにここまでできる人は世界に何人いるだろうか。白人の支持も受けるほどの多くの人の心に響いた彼の演説は、普段テレビで見るとような演説とは違い、心の底から訴えている魂の入ったものであった。この演説も文章で見ると、映像を実際に見るのではまるで迫力が違った。前期では、映像を使った多くの教材を見ることで、多くの知識を得ることができとても楽しい授業だった。〉

オバマ大統領の広島での演説やキング牧師の演説の英語をかなり詳しく説明したが、難解な教材と感じた学生もいたかもしれない。しかし、学生時代にこうしたリアルな映像や英語音声に接しておくことは大切なことである。

後期には〈京都人の密かな愉しみ：月夜の告白〉の冒頭の英語スクリプトを書き出し、また〈ママたちへ：子育ての最新科学〉の要約とその英訳を課した。テキストで触れることができる内容はごく表層的なレベルに留まる。学生の知的好奇心を満足させようとして、関連したテーマのビデオライブラリーを用意するためには常に NHK や BBC その他の BS 放送の番組表に目を光らせていなければならないが、それはまた楽しみでもある。教養英語の授業を受ける中で和洋の幅広い知見を修得していただければ幸いである。

非常勤講師 氏名：Hill 美子

対象科目：生活支援技術Ⅳ

I 授業の目標・工夫

生活を支援するということは、その人が生きてきた歴史、考え方を尊重して行うこと、つまり、利用者の主体的な自己決定の尊重です。これら、多様な利用者の生活（被服領域における）についての理解、支援する為の柔軟な思考力、個々の利用者にアプローチする為の実践力を身につける事を目的としています。

生徒の集中力を持続させ、理解した内容を定着させる為に、講義の中に実験や演習を取り入れる工夫をしました。それによって、生徒一人ひとりが思考錯誤をしながら考えをまとめて、グループ内でそれらの意見交換を行う等、能動的に講義を受ける様子が伺えました。

II 授業の自己評価と今後の改善・工夫

アンケートの集計結果より、『テスト期間中の集中講義という状況であるのに、情報量が多すぎ、進度が早い。』という指摘がありました。

この点につきましては、国家試験対策を含め、講義内容が多岐に渡るため、講義内容を減らすことは難しいですが、今後更に、講義内容を精査し、受験対策はもとより、利用者の生活支援に的確に対応できる技術・能力の向上を目指して、生徒が効率よく学べるよう、改善してゆきます。一方生徒は、課題として提出したレポートを、もう一度じっくりと時間をかけて復習し、理解を深めて下さい。

製作実習についても、『限られた時間内に完成することが大変だった。』という意見が寄せられました。しかし、結果的には、時間内に規定通りの作品を受講者全員が、完成していました。自信を持って、これらの縫製技術を実践の場で活用して下さい。

非常勤講師 氏名：深江久代

対象科目：発達と老化Ⅱ(社会福祉学科介護福祉専攻 講義)、医療福祉システム論(学科共通科目 講義)

I 授業の目標・工夫など

各科目の授業目的は以下のとおりである。発達と老化Ⅱ：(1)成長・発達の観点から老化を理解し、老化に関する心理や身体機能の変化及びその特徴に関する基礎的な知識を習得する。(2)高齢者に多い疾病や老化に伴う機能低下が及ぼす日常生活への影響などを理解し、生活支援技術の根拠となる知識を習得する。医療福祉システム論：社会の高齢化が進展する中で、地域における保健・医療・福祉の現状の問題点とその解決方法や実践の場での連携の方法を学ぶ。

授業については、学生が理解できるということを常に心がけて展開している。そのために、学生が関心を持てるように身近な新聞の切り抜きや、家族の体験談、視覚的に学べるビデオ、介護施設での実習の体験を取り入れている。また、グループで疾患や症状、留意点について調べ、グループワークで検討し、発表する機会を設け、さらに学生の発表をふまえて要点をまとめて板書するなどの工夫をしている。また、パワーポイントを使う場合は、重要事項、キーワードなどを記入できるような資料を作成し、講義を聞くだけでなく、記入することで、理解できるような工夫を行った。

II 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

社会福祉学科介護福祉専攻から依頼された「発達と老化Ⅱ」についての授業に対する学生の授業アンケート結果は、「授業のあり方」：4.29～4.39、「教え方」：4.20～4.39、「総合評価」：4.24～4.27 であり、学科・専攻平均点とほぼ一緒であった。自由記載では、「グループワークをすることで他の人の意見が聞けたので良かったと思う」「グループワークをすることでクラスメートとコミュニケーションが取れ、考えが広がったり自分では考えつかなかったことも知れて良かった。自分たちで調べたものを発表することで、理解が深まった。」という2点のみであった。(改善して欲しいこと、付け加えて欲しいことの記載は無し)講義をする中で、学生は大変素直でまじめであるという印象を受けている。今後も学生の理解力を確かめながら、介護福祉士の仕事の重要性や看護師との連携の必要性を強調して教授していきたい。また、引き続き体験例、新聞、ビデオ、グループワーク、パワーポイントなどを積極的に取り入れ、学生各自が関心を持って学習し、授業で確かめていけるような講義を行っていきたい。

「医療福祉システム論」については、授業評価を実施しなかった。最近の医療・福祉の動向を踏まえ、地域包括ケアシステムや多職種連携について強化した内容を教授した。各学科の実習等があり一つの学科のみでの講義になったり、歯科衛生学科と介護福祉専攻は1年生、社会福祉専攻は2年生というように、受講学生の学年の違いがあるなど難しさを感じている。日々の授業の感想には、「違い分野の先生の講義で関心がある。」「他学科の学生がどんな職業を目指しているのか聞けて良かった」等が書かれており、多職種連携について考える基礎となっていると認識している。質問の記述もあることから、今後も関心をもって受講できるよう、より工夫していきたい。

非常勤講師 氏名：松浦崇

対象科目：社会的養護（講義）、社会的養護内容（演習）

I 授業の目標・工夫など

保育士養成課程において、「社会的養護」の理念や体系、法制度、実践について学ぶ科目となります。

多くの人が通ってきた保育所や幼稚園と異なり、社会的養護の施設や里親には馴染みがないことがほとんどであり、社会的養護に関して、具体的イメージがもてない、理解ができない、興味がもてない、という問題を抱えることも多くあります。そのため、授業では、DVDなどの映像資料や、施設経験者の手記などを多く用いて、理解を深められるよう心がけました。

II 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

今年度、初めて担当させていただきましたので、短大のカリキュラムや学生の皆さんの様子など分からないことも多く、不十分な点も多々あったかと思うのですが、結果として、全体的に高い評価をいただくことができ安心しました。

特に、「ビデオを見ることで身近に感じることができた」「よく知らない施設や仕組みが多かったので、ビデオで映像を見れてわかりやすかった」「DVDや資料などを活用していただいたので、各々の実状がよく分かった」など、映像資料が参考になったという意見が多くありました。また、「説明が丁寧であった」という評価もいただくことができましたので、今後も、資料を効果的に活用しながら、丁寧な説明を心がけていきたいと思います。

逆に、「疑問点を必要に応じて教員に質問した」という項目は、他に比べて低い結果となりました。コメントシートを活用し、質問で挙げられた項目については次の時間の冒頭で回答しましたが、より学生が意見や質問を述べやすくなるよう、工夫していきたいと考えています。

III 学生の皆さんに対して

授業では、虐待や貧困、差別など、辛い問題を扱うことも多かったのですが、学生の皆さんが他人事と捉えず、真剣に問題について考えてくださり、大変嬉しく、また心強く思っています。

授業を一つのきっかけに、今後も社会的養護について関心をもっていただけると、大変嬉しく思います。

非常勤講師 氏名：増田 京子

対象科目：ソーシャルワーク演習Ⅱ・Ⅲ（演習）

I. 授業の目標・工夫

実務家教員として、理論と福祉現場に即した実践とをつなぐことを目標に、ソーシャルワーカーに最も必要とされる自己覚知、他者理解を意識し、事例や映像を用い、ディスカッションを行う演習を展開してきた。毎時間、演習後に振り返りシートへの記入を行い、個別にスーパービジョンを行うことで、学生との双方向の理解を深めるように努めた。

演習Ⅲ（後期）には、現任教員、教職大学院の学生と共に、教育と福祉の両面からのスクールソーシャルワークの演習を行った。このことは、演習後の学生のコメントからも、高い評価を得た。今年度も可能な限り、継続していきたい。

II. 授業についての自己評価と今後の改善点・工夫

今年度、本校での勤務が初めてであったこともあり、学生の反応を感じながらの手探りの授業であった。アンケート結果は、総体的に高評価をいただいたが、他の科目との関連性や本科目の独自性について、十分認識しながら、授業運営ができたとは言い難く、今後の課題としたい。

非常勤講師 氏名：宮下友美恵

対象科目： 保育表現技術Ⅰ（言葉）

授業のあり方、教え方、総合評価のすべての項目について、学科・専攻平均点よりも高い評価結果であったことは、来年の授業につながるものである。

自由記述の中で、紙しばいや絵本の読みきかせの見本を見せたことが、具体的でとても良かったとの意見をもらったので、今後も続けていきたい。紙しばいの制作は、学生がとても意欲的に取り組んでおり、1つ1つの作品の質も大変高かった。1人1人の思いを丁寧に受け止めながら、自分らしい作品を作ることができるような指導を心がけていきたい。